

ハリー・ポッターは2p 完結でいい

りなむ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「こうしてジェームズとリリーの間に生まれた子供、ハリー・ポッターは幸せに暮らしましたとき。 完」

名作児童小説は生まれない。

1pはあらすじ、もう1pはエピローグ。

そんな三文小説を目指して、今日も彼女は奮闘する。

*親世代中心の救済小説です。捏造注意

*なんでも許せる人向け。

目次

4年生

1話	魔法世界とわたし	1
2話	シリウスとわたし	4
3話	先輩と僕	7
4話	クリスマスパーティーと友人達	10
5話	禁じられた森と狼とわたし	14
6話	友人といじめっこ	19

5年生

7話	バジリスク殲滅作戦①	24
8話	バジリスク殲滅作戦②	29
9話	不信	32
10話	悪夢	35
11話	アフターケア	40
12話	かちかち山	43
13話	嘘つき同士	48
14話	穢れた血事件	50
15話	穢れた血事件 after	53
16話	仲直り①	56
17話	仲直り②	60
18話	魔法生物 vs 魔法使い	63
19話	人生ってままならない。	66
20話	果たせない約束	68
21話	迷子の少年	70
22話	家、行ってもいいんですか？	73

23話 お泊まり会だよ！全員集合！

24話 真夜中反省会

6年生

25話 モテ期？

26話 奇妙な会合

27話 こんにちはは、モブです。

28話 とある師匠の見解

29話 ハロー、グッドバイ

30話 お相手は？

76

79

82

85

88

91

93

96

4年生

1話 魔法世界とわたし

このホグワーツ魔法学校に通いはじめて早4年。最早見慣れた赤のカラーリングの談話室、グリフィンドール寮。現在そこに所属するのは、かの有名な児童書の主人公と仲間達……ではなく。その主人公の両親と、彼らの友人達であり後の”忍びの地図”製作者、通称悪戯仕掛人。

「なんなん。ほんとなんなん。なんで私だけこんなに課題多いの〜。リリーイー。」

「助けないわよ」

「ガツテム!!」

「リオが授業中にあんなに寝ていたのが悪いのよ!」

プリプリ怒るのはリリー・エバンズ。ハリーの母親、本のなかでは守りの加護という最強魔法をハリーに施した偉大な魔女。綺麗な赤毛とエメラルドの瞳は誰もが振り返るほどの美人といえる。正義感が強く曲がったことが嫌いな、言うなれば”子供らしい”性格の女の子。

「あありりー!!怒る君もなんてチャーミングで可愛らしいんだ!」

「五月蠅いわよポッター!!ちよつと、勝手に隣に座らないで頂戴!」

「あ、ジエームズ。おかえり〜」

「やありオ。君のアイデアは実に上手くいったよ!フィルチのあの顔、君にも見せてあげたかった!」

「なっ：リオ!あなたまたまたポッター達に余計なこと言ったのね?!」

ジエームズ・ポッター。ハリーの父親、今はリリーに猛アタック中。悪戯仕掛人のリーダーで、クディッチのシーカー。最近女子の中でシリウスに勝るにも劣らない人気がある、らしい。ナチュラルハイで陽気な彼は、実は人一倍警戒心が強かったりする。懐に入れるまでが長く、しかも一度敵とした人間には決して心を開かない。その分味方には優しいけどね。ちなみに私は彼に”みなされる”まで2年半か

かった。

「じゃあその素晴らしい私のアイデアのお礼に課題の答え教えてください」

「…なんだまた天文学か？ほんと苦手だなお前」

「ウン、わたし、夏の大三角形だけ分かればいいんだ」

「は？」

私の課題を覗き込んだのはシリウス・ブラック。イケメンである。ファンクラブの管理はすっかりしろよ。そろそろ女の子に刺されなにか心配な今日のこの頃。女の子攻略は簡単にできるのに弟にはどう接したらいいか分からない、哀れなわんちゃん。私はつい先日レギュたんと一緒にお昼を食べた。ははっ羨ましかろう。

「この前は魔法史で苦しんでたのに…リオって本当に防衛術しかできないよね」

「リーマスさん、笑顔で人を貶すのはやめて」

リーマス・ルーピン。まごうごとなき腹黒属性。最近はこのキャラが定着した気がする。背後に見える黒いオーラはオプションかしら？何か新しい魔法でも覚えたの？

「え？」「いやなんでもないです」

「ぼ、僕で良かったら手伝うよ！リオには防衛術たくさん助けて貰ってるし」

「ピーター！流石私の希望！私の癒し！」

「っうわ！だ、抱きつかないですよ！」

「おいリオ！ピーターが嫌がってるだろ」

シリウスに引き剥がされた、私の癒し担当その1ピーター・ペティグリュー。小柄で優しいげなマイナスイオンを醸し出す貴重な癒し枠。これがあの小汚ない豚鼠になるなんて、ハリポタ界七不思議のひとつだ。ほんとは入学初め癒し枠を期待したのはリーマスだった…現実って残酷。そんな唯一の希望を散らさないようピーターの食生活

は私が目を光らせているから体型には未だ問題は出てない。間違ってもあんな豚にさせないよ？

「…はあ。仕方ないわね。ほんとうに、今回つきりだからね！」

「リリー！流石は私のエンジェル！マイスイートハニー！！」

「リオその言葉は聞き捨てならないな！リリーは僕のマイスイ…」

「黙りなさいポッター！！」

「ま、俺も見てやるよ。天才だからな」

「お礼はチョコレートでいいよ」

「が、頑張ろうね！リオ」

ガヤガヤと騒がしくなる談話室。その中で、つかの間の平和に浸る私こと高野理央。グリフィンドール4年生、得意科目防衛術、苦手科目天文学と魔法薬学。実年齢と外見年齢がかけ離れているのはご愛嬌。うっかり此方の世界にやってきた、ごくごく普通の魔法使いなのです。

2話 シリウスとわたし

「……全くわからん」

シャーシューショー？分かるかこんなの!!ただ変な息継ぎにしか聞こえん。何が【猿でも分かるく蛇言語勉強集く】だ!バツシーンと本を床に投げつけて、ゴロンと床に寝転がる。見上げる本棚はびっちり蛇言語についての本がつまっついていて、思わずため息が漏れた。

「先が長い……」

やっぱさ、日本人って他言語学ぶのに向いてないと思うんだよね。だって島国、小学校から英語やってたって、英語喋れる人なんて極僅かだし。私だって喋れないし。あ、今は喋れるか。あはは魔法のおかげです。ダンブルドアに頼んで蛇言語も分かるような永久魔法かけてもらおうかな……。いや、そもそもダンブルドアが蛇言語分かるか知らないし、蛇言語使えるようになりたいって知られるのは避けたい。なら私の魔法で：それはピラス外してる時しか使えないしなー。ぼんやりと右耳にあるピアスを弄る。取るか、取らないか、少し迷ってやっぱりやめた。

「……もうちよい頑張るか」

まあ、これは最終手段にしよ。

身体を起こして、再度本を開いた。

結局あれから3時間ほど勉強して、必要の部屋を出た。今日は定休日の為廊下を出歩いてる生徒はいつもより少ない。みんな外か、自寮にいらのだらう。人が少ない分、いつもよりちよっぴり殺風景な廊下を歩いていると、なにやら空き教室から呻き声?が聞こえた。なんとなく興味をもってこっさり扉を開けて、教室を覗いて、ギョツとする。

「……………んっ……………はあ……」

濃厚なキスシーンでした!!!!

流石海外!!こんなとこまでオープン!しかも超濃厚!!

心のなかでアホな突っ込みをかまし、興奮ぎみで視界にはいるロー

ブを見て、はて?となった。色が赤と緑、つまりグリフィンドールとスリザリンド。この寮つてめっちゃめっちゃ仲悪かったと思うんだけど。すると体勢を変えた為か、交じりあう(意味深)二人の顔が私の位置から見えるようにー

シリウスだった。

しかも、目、合った。

例えるならば息子のエロ本を見つけてしまった母親、検索履歴にラブホテルの名前を見つけてしまったお姉ちゃん。私は静かに、素早く扉を閉めて寮へ向かってダツシユした。――80メートルくらい。かれこれ私、運動なんて高校時代の体育の授業以来してこなかった超インドア。別名引きこもり。50メートルの全力ダツシユで息切れするポンコツです。当然ながら+30メートルも多く走った私は限界で、ゼーハーと無様に呼吸を整える。そうして少し落ち着いた頃に「おい」

後ろから、声がかかった。

「うっわ、なんでいるの?」

「お前が逃げたから追ってきたんだよ」

「え、なにその私のせいみたいな言い方!私はただシリウスが彼女とイチャついてるの見ちゃって申し訳ないから逃げてきたのに!...あれ?じゃあこれ私のせい?」

「別にアレ、彼女じゃねーよ。ただせがまれただけだ。」

ふんつと機嫌が悪そーなシリウス。ただせがまれただけで。とうか女の子すっぱかして此方きたの?どんだけ私のこと好きなのシリウスくんや。

「クリスマスパーティー、断ったら面倒だったんだよ。だからああなった」

「ひゅーうもツテモテだねえシリウス」

「うるせえ。お前こそ一人で何.....また必要の部屋にでもいたのか?」

「え、何で知ってるの」

「…知りたいか？」

シリウスはニヤリと、悪戯が成功した時のように意地悪く笑った。それを見てあつと思いが当たる。

「もしかして地図、完成したの？」

「っ…よく気づいたな、もう8割型完成してるぜ。それにしてもリオ、しよっちゆう必要の部屋行ってるよな。何してんだよ？」

「パーティーのダンスの練習」

「……………相手、誰だよ」

「嘘。ほんとは昼寝。パーティーは行く気ない」

「はあ!?なんで？」

「なんでも。シリウスの相手は誰なの? マリー? トレーシー? それともウエンデイ?」

「……………」

「…:シリウス」

「、なんだよ」

「避妊はしっかりね」

「ブツツ!! ——アホかお前は!!」

ぎゃいぎゃいと騒ぎながら廊下を歩けば、あつという間にグリフィンドール寮の前と着く。合言葉を告げて、中に入ろうとすると、シリウスがポツリと呟いた。

「リオ」

「ん？」

「ほんとにパーティー、行く気ないのか？」

「ないよ」

あ。また機嫌悪くなった。

3話 先輩と僕

「そんなわけであつかり覗き見たからシリウスの機嫌が悪くて、寮でも面倒だから逃げてきた」

でも私だけ悪いってことじゃなくない？教室でチユウしてたシリウスも悪くない？

定休日の昼過ぎ。僕自身が気に入っている、人気の少ない中庭の木陰のベンチ。本を読む僕の横で不満を垂れる彼女はリオ・タカノという。グリフィンドールの4年生で、あの兄の友人だ。

「だからって僕のところに来ないで下さい。」

「いいじゃんレギュたん。」

「…ふざけたあだ名で呼ぶなど言った筈ですが」

「あ、トメさんから貰ったマドレーヌあるけど食べる？」

「……………」

彼女は変人だ。

トメとはホグワーツの厨房で働くしもべ妖精。この人はトリナーメと仲が良いらしいが、敬称付けでトリナーメを呼んだりする。僕だって家のしもべ妖精、クリーチャーと仲が良い。でも敬称をつけたことなどなかった。前に何故？と聞くと年上だからと返ってきた。日本ではネンコージョレットという文化があるらしい。「あらレギュラスはクリーチャーに対してつけなくていいのよ。だって貴方達は主人と従者の関係でしょ？でも私とトメさんは友人関係。加えてトメさんは私のためにご飯やおやつを用意してくれる、それに感謝と尊敬を籠めて敬称を付けてるの。ありがとうって意味でね。だから貴方がクリーチャーに言うのは「ありがとう」でいいのよ。きつと喜ぶわ」確かにクリーチャーは僕が礼を言うと言いついて喜ぶ。…話が逸れた。「プレーンとチョコとストロベリーがあるけど。私はストロベリーがいいな、レギュラスは？」

「…チョコレートを。」

彼女は質が悪い。

遠慮がなく図々しくズケズケと他人の領域へ侵入してくる。

初めは何故兄がこの人と友人でいられるのか不思議に思った。あの人は、こんな相手に土足で踏み込むような馬鹿は嫌いだっただ。兄は確かに無鉄砲で愚直な部分もあるが、勘は鋭いし神経質なところだってある。だから気になって、事あることに僕のところへ寄ってくる彼女と会話を交わす中で、気づいてしまった。

「……こいつ確信犯だ、と。」

自分の非を認め、それを改めようともせず、けれど決してギリギリのラインを越えてこない。最後の最後でスルリと躲す確信犯。結局相手が、この場合は僕が、根負けして諦める形で収まるのだ。実に狡猾だ。グリフィンドールなんかよりよっぽどスリザリンが似合う。

そして、なにより質が悪いのは、それを楽しいと感じている僕に気づいているところだ。

「ねえ貴族って普段なに食べてるの?」

「うっわお父さん美人ー。え?オリオン座?あ、何だ名前かーあっはっは」

「え?28しか貴族っていないの?すつくなあ!」

多くの柵も、レットテルも、梓組みすらも塵ほど気にしない。非常識、無礼の文字を恐れもしない。この人にとって僕はただのレギュラス・ブラック。なんのしがらみも肩書きもない、皮肉にも僕自身ですら気づけなかった望みを、彼女はいとも簡単に暴いてしまった。

「んまあ〜。流石トメさんだなあ〜」

彼女は変に鋭く、そして鈍い。

無心に菓子を頬張る彼女は、きつと兄が不機嫌になった本当の理由に勘づいてもいないのだろう。

「リオ先輩」

「ん?」

「僕、クリスマスパーティーに行ってみたいんです。でも3年生は上級生に誘われないと参加できなくて…。リオ先輩、僕をパーティーに連れていってくれないませんか?」

「えっ」

僕は、彼女にこういう言い方をすれば断れないことを知っている。

案の定リオ先輩は、モゴモゴと口を動かした後言いつらそうに視線をそらした。

「……あの、レギュラス。連れて行ってあげたいのは山々だけど…その、実は私、踊れないのよ。」

「大丈夫です。踊らなくても参加したいだけですし。万が一でも僕がリードしますから。」

「ええー。じゃあ、うん、いいケド。……レギュラスってこーゆーイベントに興味あったんだねえ…」

しみじみと呟く先輩の発言は、的を射ている。

イベント自体に興味なんてさらさらない。

ただ……自分は断られた筈の先輩が、僕と参加しているところを見た兄がどんな反応をするのか、興味があるだけだ。ああ、やはり彼女は存外鋭く、鈍い。

無意識に小さく笑みが零れた。

4話 クリスマスパーティーと友人達

キラキラ照明の輝くパーティー会場。着飾る女の子達は浮き足だっているし、僕だって初のホグワーツのクリスマスパーティーだ、ワクワクしてる。まあ一つ残念なのがパートナーが愛しのリリーじゃあないってことだけで。会場で見かけたリリーは赤いドレスを纏っていて天使のように綺麗で可愛いかった!!隣のあいつ…確かハッハルパフのリード・エルリックだな。覚えておこう。全くあんな奴より僕の方がよっぽど…:…まあリリーは照れ屋さんだからね!!来年こそはパートナーになってもらうよ!リリー!!

「なんで!レギュとお前が一緒にいるんだよ!!」

「レギュラスがパーティーに参加したいって言うから。ほら、下級生は上級生の誘いがなきゃ出れないでしょう?」

「お前行かないって言ってたぞ!」

「そりゃ最初は行かないつもりだったわよ。でも行くことになっちゃったのよ」

「はああ!」

「兄さん五月蠅いですよ。目立って恥ずかしいです。貴方のパートナーも怯えていますし、やめてください」

「おいレギュラス!お前っ!!」

会場のだ真ん中で怒鳴り声。

僕も、僕がエスコートしていたレイブンクローの女の子も、みんな気になって視線をむけると、そこにいたのは我が親友とその弟…それから、リオ。確か彼女はパーティーに出ないって言うていた…けれど確かにその姿は目の前にあつて。紺のロングドレス…周りの女の子達と比べれば少し地味な配色だが、普段より大人びた風貌がとても良く似合っている。黙っていればどこかの令嬢に見えそうだ。

「あーもうめんどくさい!!私(づ)はん食べてくる!」

ほんと、黙っていればだけど。

口論を始めたシリウスとレギュラスを他所に、もぐもぐとめんどく

さそうに食事を始めたりオ。その光景があまりに面白すぎて、僕は笑って彼らに近づいた。ー全く、今夜ばかりは我らが仕掛人も各々パートナーと過ごすと思っていたのに。本当に楽しい友人達だ！

「やありオ災難だったね！とつても面白かったよ!!」

「ああジエームズか：あれ？パートナーの子は？」

「断りを入れてきたから大丈夫さ。それより、君参加しないって言うてたよね？」

「レギュラスが行つてみたいって言うから、仕方なく」

「シリウスの誘いは断つたのに？」

「私ダンス出来ないから。………シリウス、私が踊れないって言うたら腹かかえて笑いそうじゃん」

でもやっぱり面倒なことになったわ、と溜め息をつきながらシリウス達に目を向けるリオ。シリウスは家族と仲が悪いと言っていたけど、なんだかんだレギュラスとシリウスはよく話してる（主に突っかかっているのはシリウスだけ）。その理由に、常にリオがいる気がするの考えすぎかな。

「ねえ英国の人って、貴族じゃなくてもみんな踊れるものなの？」

「うーん、人によるんじゃないかな？僕は踊れるけど…。ニホンに踊る文化はないの？」

「マイムマイムなら踊ったことある」

”マイムマイム”??

「あーみんなで炎囲んで踊る……いや怪しい儀式とかじゃないわよ!? 変な顔しないで！」

彼女は色々な顔を持っていた。例えば僕たちと悪戯をする顔、リリーや女の子達とお喋りする顔、レギュラスや下級生に話しかける顔。あの憎きスニベルスにだって、彼女は物怖じせず話しかけているし、仲が良い。きつとそのどれもがリオの素顔なんだろうと思う。この友人は底が浅いようで深いのだ。悟らせるのを良しとせず、未だ分からない部分だって沢山ある。それでも仲良く出来るのは、彼女が僕達を大好きだって知ってるからであつて。ここまで清々しい男女の

友情つてのも気持ちがいい。…まあ、我が親友は知らないけど。

「そうだ、リオ。クリスマス休暇にシリウスが僕の家泊まりに来るんだ！君もどうだい？リリーも誘って！」

「…それ後半部分が本音でしょ。うーん、私学校に残るつもりだから考えておくね」

「あれ？確か去年も残ってなかった？」

「まあね。家が遠くて」

リオはホグワーツで珍しい東洋人。確かにイギリスからは遠いけど、マグルのヒコキキ？っていう乗り物もあつたはずだ。シリウスと同じで家族と仲が悪いのだろうか？でも彼女からそんなこと聞いたこともない。

「遠いつたつて家は二ホンだろ？」

「ううん」

「え？ご両親ニホンにいないの？」

「うん」

「じゃ、何処にいるの？」

「どこだろ？」

「え？」

「あつ、これ凄い美味しい!!ジェームズ！これ美味しい！」

「え、あ、うん？」

勝手に僕のお皿にぽいぽいと料理をのせるリオ。「若いんだから沢山食べなきゃー」いや君も同じ年で…

「リオ!!なにジェームズと飯食ってんだよ!!」

「あ？シリウス？なに話し合いは終わったの？」

「今から俺と踊るぞ!!」

「は!?!嫌無理だつて!!」

「レギュとは踊つて俺とは踊れないのかよ!?!」

「いやだから踊つてな…:ちよ、レギュラスー！」

今度は僕の目の前で口論を初めたりオとシリウス。リオの目が半分死んでいて、シリウスは意地になって、もうなにがなんだか。肝心のレギュラスはシリウスが面倒になったのかこれ以上関わるまい

と遠くにいるし……、ちよつと笑つてるけど。結局リオは自分が踊れないことを白状して、シリウスは案の定馬鹿にした。それに怒ったりオガシリウスの足をハイヒールで踏みつけ（あれは痛い）喧嘩勃発、マクゴナガル先生の説教が飛んで、不貞腐れる二人を見てやっぱ僕は大笑いした。

5話 禁じられた森と狼とわたし

禁じられた森、なう。

サワサワと生い茂る、不気味な森を目の前にそつと私は右耳についているピアスを外した。ポケットに大切にしまい、それでもつて私の秘められし封じられた力(笑)が身体を巡っているのが……分らなかった。微妙に不安だったので徐に適当な無言魔法を使ってみる。(レダクト)……あ、大丈夫そうですね。

そうして私は身体強化と気配察知、加護の魔法を自分にかけて、森の奥へと足を進めたのだった。

さくさくと足を進め、あーヤバそうな気配するな〜と思った方には足を止め、遠回りだが迂回して目的地へと向かう。目的地？それは勿論、ホグズミード村の叫びの屋敷。ちなみに暴れ柳の道を使わなかったのは、万が一仕掛人たちに見つかったら面倒だから。今日は満月、彼等はそうー人狼となったりリーマスに私をけつして近づけさせたりはしないだろう。多少の危険を犯してでも、今はこのルートを使うしかない。

何故今更リーマスに？と疑問に思うかもしれないが、如何せん。私の体質も体質で、入学してからこの3年間一人で禁じられた森に入ることをダンブルドアに許されなかったからだ。これまで3年の修行の末、まあ何かあっても逃げ切れるだろうといえる実力を身に付けたからこそ、現状ここにいれるのだ。ー全く、世界渡航の特典か障害か、良くも悪くもこの力の扱いは厄介である。

そんなこんなで考えことをしていたら、森を抜け、叫びの屋敷が見えてきた。ふう、と一息。女は度胸。思いきって扉をあける。

「グルルルグルアア!!」

「ーっわ!<動かないで>」

イメージは簀巻き。布団はそのぼろ布で代用。扉を開けて入ってきた私に襲い掛かった人狼は、あつという間に簀巻き状態で私の足

元へ転がった。ーいきなりきた。凄いびつくりした。

「グルアアアアア!!」

ボタンボタンと暴れ狂う狼ーこれが、リーマスか。

心臓がバクバク鳴る。目の前の怪物は、普段の温厚な彼を想像することもできない。知っていた。知識として、記憶として知ってはいたけれど。

「<……リーマス。私よ?分かる>」

「…う、グル…アアア…!」

「<そう、いい子ね。戻れる??ー呪い解除。>」

私は、人狼に変身することを一種の呪いだと認識していた。満月で無条件に狼へ変身する呪い、感染ルートは咬まれる…つまり唾液感染ではないかと。正直、この魔法の世界で科学だの物理だの真面目に考えるのは馬鹿馬鹿しいと感じるが、私の体質は…この普通の魔法使いやしもベ妖精とも違う、”気質の違う魔力”は私の論理的思考や想像力が魔法を成功させるのに大事だと師匠に教えてもらった。端的に言うならば思い込みを強くしろ、ということである。頭で強く感じるもよし、けれど言葉で表すのが最も強力であるところの3年間の特訓で判明してる。これを理解するまでどんなに大変だったか。…ワケワカンナイ魔法でよくやったわたし、よく頑張ったわたし。閉話休憩。

そして、結果的にこの”思い込み”は成功だった。ベキバキと嫌な音をたてながら、リーマスは徐々に人間へと戻っていく。簀巻き状態から解放して完全に元に戻った頃には、私の魔力も限界だった。超疲れた。前やった魔獣達とのリアル鬼ごっこ…禁じられた森編より疲れた。

「……………り、オ…?」

「うん。調子はどう?リーマス。あんまり良くなさそうだけど」

「……………どう、して、」

リーマスはまず、屋敷の窓から見える満月を見上げ、その後に私の顔を、もう一度満月を見上げた後、恐怖と混乱を顔に浮かべ、私を見

た。彼は震える身体を押さえ込むように両肩を抱き、言葉にならない声を何度か漏らす。ばれた、怖がられた、退学、嫌われる、とか思ってるんだろうな。

「リーマス、とりあえず傷の手当てをしましよ。あと落ち着いて。私あなたを退学にしようとか嫌ったとかそんなわけないから。確かにさっきまではスゲー怖かったけど、いや普段の真っ黒笑顔もスゲー怖いけど、今は怖くないから。むしろそんな小動物みたいに震えられるのが居たたまれなくてしょうがないから。あと、服、着てクダサイ。地味に筋肉ついてる上半身とか、そのいい感じに大事なところを隠してるぼろキレとか、正直眼福だし写真とったら売れるんじゃないかと思うけどー痛い痛い!!」

「リオ？」

「リーマスさん頭ミシミシいってます！ごめんなさい！もう見ないから！窓に写ったのこっそり見ようとかもしないから!!はーなーしーてー!」

リーマスお着替え中。私はずっと正座だった。

「ーリオは、僕のこと気づいてたの？」

「うん。私の体質的に、リーマスの中に違う魔力感じてて。だからそうなんじゃないかなって。」

「体質？」

「……ここから先は皆に内緒にしてほしいんだけど」

「ジエームズ達に？リリーは知っているの？」

「リリーも知らない。知ってるのはダンブルドアと、これの特訓付き合ってくれたお師匠だけ。その、これは公にするのは結構危険なの。……だから」

「……………僕も君に人狼と黙っていたから、分かった」

「ありがとう。私ね、どうも普通の魔法使いと魔力の気質が違うみた

いな。元となる魔力が違うから、一般的な呪文を使わなくても魔法が使えるし、自分で考えついた魔法だって使える。でもこの魔力が、どうも魔法動物に魅力的みたいで…強い動物程わらわら私を狙って寄ってくるのよね…。」

「…確かに、僕も変身しているときリオが凄く美味しそうな気がした。いや、待って、ならなんで君は禁じられた森なんかに入ってきたんだ!?!危険すぎる!!」

「それについては修行したから平気よ。襲われても逃げ切れるくらい力はつけてるから。ー話を戻すね、それで私の魔力は珍しい。それは、闇の勢力にも目をつけられるかもしれないってダブルドアが言ったの。並み程度の魔法使いなら気付かないけど、上級の魔法使いになれば私の異質さに気づくかもしれないって。だから、普段はこのピアスをつけてる。これは魔力の気質を、通常のものに変換してくれるの。だからこれをつけてる間私は魔法も普通のしか使えない、魔法動物にも狙われない。ーこれが、私の秘密だよ。リーマス」

「いきなりだもの。納得するのは、難しいかな…?」

「違う、そうじゃないんだ。君の身体のこととは分かった。でも、此処へ来ることはとても危険だったんだろう?それなのに…どうして…」

「それはね、あなたに教えたかったの。」

「そうー人狼だろうがなんだろうが、リーマスは大切な友達だよってこと。」

そこで初めてリーマスは顔を上げた。此処へきて初めて真正面から顔を合わせた。真っ青な顔色で、ワナワナと口元を震わすーまるで迷子の子供のようだと、私は思った。ゆっくりと手を伸ばす。リーマスの肩に軽く触れると、ビクリと大げさに体を揺らした。そのまま壊れ物を扱うように、丁寧に、リーマスを抱きしめる。本当はずっとこうしたかった。ちょうど3日前授業で人狼の話題が扱われた時、仕掛け人達に大丈夫だと笑いかける、その机の下で震える拳を抑え込む、その姿を見たときから。

「……………僕が怖くないの？」

「怖かったら今ここにいないわ」

「…リオ」

「うん」

「…リオ」

「なーに？」

「……………っありが、とう…」

静かに涙を流すその背中を、ポンポンと撫でる。その震えた小さな身体を、慈しむように。

6話 友人といじめっこ

「セツツツツブルスウウ!!」

「ぐはああ!!!」

「!?!」

「リオ!!」

例えるなら突風か。台風か。嵐か。

兎も角、一瞬にしてさっきまでの空気は飛散したと云える。――尤も被害者は存在するのだが。

「久しぶりセブルス!!クリスマス休暇ぶりかなあ!?最近会えないなって思ってたの!!」

「~~~~!!」

「あれ?」

「リオ、セブが苦しそうだわ。上からどいてあげて」

「あっはい」

「ゲホッゲホッ!、」

全力で助走をつけ、突進したのは高野理央。

それに潰された男の名はセブルス・スネイプ。不幸ながら高野理央に癒し担当その2（ツンデレ枠）という、彼にとっては訳の分からない役割を与えられた哀れな少年である。理央に冷静に突っ込んだのはリリー・エバンズ。彼女には残念ながら、ジエームズ、シリウスとは違い理央がセブルス限定で行う奇行に耐性があつた。慣れた光景に今更驚くわけもない。

「セブルス大丈夫?」

「きつ、貴様がそれを言うかああ!!!毎度毎度何度言えば貴様の脳は理解するのだ!?!何故普通に挨拶が出来ない!?牛かなにかかお前は!?!」

怒り狂い胸ぐらを掴み挙げるセブルスに、驚き戸惑う理央。その申し訳なさそうな表情に、一瞬たじろぐセブルス。言い過ぎたか?いや僕は悪くない。元はと言えば全力で突進してきたこいつが悪い!正確に鳩尾に頭を当てるとか嫌がらせか!その心配そうな顔すら腹立たしいわ!!

しかし目に見えて元気のなくなった理央、もしかしたら反省してるのかもしれない。…………いや騙されるな僕!!何度も経験したではないか!この程度でこいつは反省などしない!!今度こそ本当に反省するまで許さな—

「ごめんねセブルス」

しよんぼりと謝罪を口にした理央に、ウツとセブルスは胸ぐらを掴む手を緩める。

普段の振る舞いからかけ離れた悲しげな顔に、思わずほだされそうになる心。……………クツ…本当の本当の本当に、反省したのなら許してやらないことも

「今度からは後ろから飛びつくようにするね」

「飛びつくのをやめろ!!」

なかった。やっぱりこいつはこの程度では駄目だった。ちよつとでも許しかけた僕がバカだった。この馬鹿やはり一度…いや、落ち着け僕、ここで怒ったらまた二の舞だぞ僕。深呼吸だセブルス・スネイプ!!

ギリギリと齒軋りするセブルスは、その芸人レベルのツツコミと反応が原因で理央にからかわれていることに気づかない。キレルセブルス、笑う理央、二人に呆れてため息をするリリー。

そんな三人だけの空間に、堪えきれなくなった少年が一人、乱入する。

「やありオ!!悪いけど僕らはそのスニベルスに用があるんだ!そこを退いてくれるかい?」

セブルスとリリーはその声にハツとした。…………理央の奇行のせいで、すっかり忘れてた。

今しがた、セブルスは彼らに嫌がらせを受けていたのだ。それを止めに入っただけのリリー、だけどその程度で止まる二人ではない。にやにやと意地悪い笑みを浮かべるその顔が、なんと憎らしいことか。

「あ、二人ともいたの?」

だがしかし、高野理央はどこまでも空気を読まなかった。そんな彼女にジエームズは盛大に顔を引きつらせ、セブルスに至っては「お前何言ってるんだ」と言わんばかりの表情をしている。シリウスは眉を顰め、リリーは脱力したような溜め息を吐いた。

「……………最初から僕らはいたよ…。気がつかなかったのかい？」

「私の癒し反応センサーがセブルスしか目に映さなかったからいけしやあしやあと抜かす理央。」

それが少し勘に触ったのかジエームズの機嫌が悪くなる。ちなみにシリウスは理央登場の時からずつと機嫌が悪い。

「…そこ退けリオ。そいつから離れろ」

「シリウスに同感だね。リリーも、そんな奴と一緒にいたら君まで陰険な暗い人間になってしまおう！」

「っあなた達まだ!!」

「ええくやだく。久しぶりに会えたんだから私もセブルスと話したい、癒されたい、魔法薬学のレポートやってほしい」

「僕はやらないぞ」

「ええっそんな！今回ののはホントに難しいんだよくタスケテ！」

「課題なら後で俺が見てやる、だから」

「えー魔法薬学はセブルスの方が詳しいモン。裏技とか簡単な方法知ってるし。だからセブルスく」

「やらん！」

「……………僕らを無視しないでほしいな、リオ。君は頭だけじゃなく耳も悪くなったのかい？スニベリー」

ピリツと、空気が鋭くなった。ジエームズがこちらを睨み、当然セブルスも警戒を強める。

互いに手に持つ杖を握りしめ、緊迫した空間に、

「スニベルスでもスニベリーでもなく、セブルスだよ。ジエームズ」
諭すように、またしても空気を壊した理央。

どこまでも空気を読まない、読めないのではなく、読まない彼女。苦虫を潰した表情でジエームズはリオを睨むが、当の本人に至っては飄々とした顔で「これ前にも言ったんだけどなあ」と口にする。

そんな様子を見て、リリーはもう大丈夫だなと思った。だってここできたらリオのペースだ、もうこの人達じゃ敵わない。色々大変だし不真面目だし面倒くさがりだし変だけど（二回目）リオは凄い、それがリリーのこの友人に対する見解だった。

「……リオ、君は黙っててくれ。それとも僕らを怒らせたのかい？」

「全然。私はジェームズもシリウスも大好きだもん。喧嘩は嫌だな」

「なら邪魔をしないでくれ」

「それは無理、セブルスも好きだから。私はここをどかないし、二人が何かしようってならまた結界張らせてもらうケド」

そう、リオ・タカノの凄いとこはここなのだ。ジェームズ達は好き、でもセブルスも好き。およそ敵対する二人をなんの躊躇いもなく好きだと口にする。しかも、他はてんで駄目なくせにー闇の防衛術だけは学年トップ。つまりこの誰よりも上なのだ、ジェームズ・シリウスに対抗するだけの手段も持っている。以前同じような状況になった時は完璧な結界を四方に張った、どんな攻撃魔法も通さず、ジェームズらが懸命に攻撃する中で理央とセブルスとリリーは仲良く課題を始めるなどという事態になった。だから今回もそうなるんだろうなとリリーは考え、またジェームズもそれを思い出して顔をしかめた。

「……僕は君のそういうところが嫌いだよ」

「私は好きだよ。だからセブルスの良いところを二人にも知ってもらいたいなって思ってる」

「ハッ！スニベルスが!?!冗談だろ！」

「そういう決めつけちゃうとこ、シリウスの悪い癖だよ」

にっこりとそう言ったリオに、「行こう、シリウス」と去っていくジェームズ達。その背中を見送ってから「全くあの子達は…」と呟く姿はまるで母親のよう。過ぎ去った脅威に、やっぱりリオは凄いなあとリリーは思った。

「じゃー薬学レポート教えてくださいー！」

「自分でやれ！」

「できるわけないじゃん！」

「開き直るな!!」
他はダメダメだけど。

5年生

7話 バジリスク殲滅作戦①

5年生になった。つまり今年はOWL試験、通称フクロウ試験がある。まいった、本当に参った。天文学はまだ良い。普段のやる気／＼eroからほんのちよっぴりやる気を出せば良いのだ。なんとか赤点ストレスくらいはいけるだろ(慢心)。問題は魔法薬学、なにを隠そう大の虫嫌いな私。夏場にGが出ようものなら阿鼻叫喚、ゴキジエツト片手に戦争に駆け出した過去は懐かしい。そんな虫を分解したり刻んだりすり潰したり……拷問か。クルーシオ受けた方がよっぽどマシです。魔法薬学を習い始めて早5年、ちっとも慣れないし慣れたくないと思っっている。

閑話休題。

「そんなわけでフォークスと組分け帽子を貸してください」

「なにがどういいうわけなのか分からんのう。理由を教えてください、リオ」

「害虫駆除に使います」

「ふむ。駄目じゃ」

校長室を追い出された。

「あの糞爺」

「リオ、機嫌悪いわね。」

そんなリリーの言葉を余所に、教員テーブルの真ん中で夕食を食べるダンブルドアに視線を向ける。こっちには目もくれずマクゴナル先生と談笑する姿がなんとなく腹立たしい。この食えない爺さんめ。私も食えない奴なんだろうと思うけど。

「それにしても、毎年この日はカボチャばかりだね」

「そうね、流石に口の中が甘ったるいわ」

「カボチャの煮物とか天ぷらなら甘くないんだけどね」

「二モノ？テン普拉？」

「あー日本…ジャパニーズフードだよ。」

そう、今日はハロウィーン。合法的に悪戯が許される日、そうなれば黙っていないのが我らが悪戯仕掛け人達だ。

朝から仕掛け人達はホグワーツ中にありとあらゆる悪戯を仕掛け、そのせいでリリーは一日中ピリピリしている。今年から監督生になった彼女はグリフィンドールの問題児に手を焼いているようだった。

「…ねえリオ」

「ん？」

「ポッター達、テーブルにいないわ。何か知らない？」

「さあ？」

素知らぬ顔で目の前のカボチャパイにかぶりつく。それをジト目で見てくるリリー、怖いですリーマス助けて…あつ目逸らした。

ちなみに男子の監督生はリーマスがなった。その為か流石に実行部隊には参加していない、作戦会議には参加していたのにね。ん？なんで知ってるかって？H A H A H A 聞いちゃいけねえぜ。

ー暫くして上空に現れた巨大なカボチャランタン。それはみるみる膨れ上がり、轟音と共に破裂したところで、部屋中に降り注いだ淡いオレンジ色の光の粒。その幻想的な光景に生徒は勿論、教師陣まで感嘆の声をあげていた。リリーもこれには怒りよりも感動が勝っていたようで、笑顔を浮かべている。後でジェームズに教えてあげよ。「Happy Halloween!!」と叫んだ仕掛け人達は、大成功の悪戯にガッツポーズを決めていた。ー子供らしくて微笑ましい。幸せな光景だなあ。

うって変わって静まり返った夜、私は今校長室の前にいる。既に耳のピアスは外して、目くらましの術・隠密行動・気配察知をかけている。

ダンブルドアには止められた。でも、どうしても私は今夜行動に移

したかった。合言葉を告げ、校長室へと入る。当然ながらダンブルドアは此処にはいない。今頃ぐっすり眠っているだろう。あのラントランが爆発すると同時に、彼のかぼちゃジュースの中に睡眠薬を入れたのだ。あの稀代の魔法使いも、まさかマグル式の薬の味や匂いに気づけるとは思えない。

「おいおい。生徒がこんな時間になんのようなのだあ？」

「こんばんは、眠ってるところ悪いけどちよつと付き合っつてね。フォークスは？」

「ああん？フォークスは寝室でダンブルドアと寝ているぜ。嬢ちゃん、俺らの貸し出しは止められているんじゃないか？」

「ええ。だから朝にはちゃんと返すわ。ーどうしてもグリフィンドールの剣が必要なのよ」

流石にダンブルドアのいる部屋に侵入して、バレない自信はない。仕方ない、フォークスは諦める。要は攻撃を受けなければいい話だ。

組み分け帽子を手に入れ、次に向かったのは大広間の2階トイレー嘆きのマートル、そして秘密の部屋の入口がある場所。

バジリスクを倒すには、今夜しかない。

蛇語を勉強して1年ちよつと、ゆつくりとした発音ならばなんとか聞き取れるレベル、発音に至っては「開け」「閉じろ」だけ完璧になった、他は：齧る程度に。そうして秘密の部屋へ行く手段を手に入れ、いつ決行するかを考えた時、彼ら仕掛け人の顔が浮かんだ。ー寮を抜け出し歩き回る中で、一番厄介なのが忍びの地図だ。私の居場所が彼らに筒抜けになる。しかも彼らすら知らない秘密の部屋だ、地図上でどう描かれるのかすらも分からない。彼らに不審に思われることも、勘付かれるのも避けたかった。ならば、彼らが地図を見ない、もしくは見れない状況化で動かなくてはならない。そこで思い至ったのがハロウィンだった。毎年彼らはこの日が近づくと、毎日のように夜更かしして、当日が終わると全員その日は早くに寝る。眠っているならば地図は見ない、つまり確実に気づかれることなく秘密の部屋に行けるのは今日しかなかった。

……………それなのにあの爺さんは。

分かっている。あの人はただ私を心配してくれているだけ。でも、でもですね、私も、あなたを心配しているんですよ。

「こんばんは、マートル」

「ん………、なあにリオじゃない。こんな夜更けに………どうしたの、あんた」

「え?」

「こっわーい顔してるわよ。初めて見たわ、あんたのそんな顔」

マートルとは、少し前から良好な友人関係?を築いている。こんなにトイレは暗いのに、普段の私とはかけ離れた表情に気づいたようだった。私はそれに軽い笑みを浮かべて、マートルに向き直る。

「あのね、マートルにお願いがあるんだけど」

「はあ?何よいきなり」

「今夜見たこと起こったことは誰にも話さないで。あなたは今日私に会ってないし、何も知らない、何も見ていない。」

「何?また悪さでもしようって?あんた悪戯仕掛け人と仲がいらしいわね」

「ふふっ、まあそんなところ。それで朝まで私がここに戻らなかったら、明日の朝ダンブルドアに知らせて欲しいの。」

「話すなって言ったり知らせろって言ったり、ワケ分かんないわよ。あんた」

「お願いね、マートル」

フンツと鼻息を荒くして、彼女は奥の個室へと入ってしまった。彼女はなんだかんだで優しい、これでもし〃万が一〃があっても大丈夫だろう。

手に持つ帽子に視線を向ける。頭で強く「抜けろ!」と念じると硬い柄の感触が伝わった。

『開け』

蛇舌で口にすると、重い音を挙げて開かれた秘密の部屋への入り口。

深呼吸を一つ。右よーし、左よーし、ピアスよーし、グリフィンドー

ルの剣よーし。

ーーー準備は万端!!そう意気込んで私は穴へと飛び降りた。

8話 バジリスク殲滅作戦②

「ーっい……たあ……」

現在、死にかけ。

要は攻撃受けなきやいいんだよね〜とはぶっこいてた2時間前の私、泣いて詫びろ。こんなことなら寝室に潜り込んででもフォークス借りてくればよかった。肩と腕にかけてがつつつり噛み付かれた私は、絶命したバジリスクの横で仲良く床に横たわる。めっさ痛い、しんどい、辛い。生まれてこの方平和ボケ大国日本で20年ちよい生きてきた私、経験した一番の大怪我は右足首の捻挫だ。こんなん、耐えられるわけがない。普通にのたれうち回りたい。毒で体しんどくて無理だけど。

今回の作戦は「バジリスク眠らせて、寝ているうちに絶命作戦ー」だった。卑怯とか姑息とか関係ない、映画小説にあつたようなドキドキハラハラも必要ない。先手必勝殺せば勝ちな作戦は、最初は上手く行っていた。予想外だったのが、思った以上にバジリスクの皮が厚くて硬かったことである。なんでやねん、ハリーはあんな細腕で！しかも片手でぶつさり刺してたじゃん！主人公補正？あれで実はゴリラ並みの握力持つてますとか裏設定あつたの？

そんなわけで一発で仕留めきれなかったバジリスクは当然痛みで目を覚まし、暴れ狂い、唯一の救いは初手で両目だけは潰せたことでーあとは泥沼な殺し合い合戦を繰り広げ、見事私はバジリスクをぶっ殺し、左肩血まみれアーンド猛毒に犯されるといふ事態になりましたとき。ちゃんちゃん。

「……………あれ」

どうやら気絶してたみたい。

止血代わりに腕に巻きつけていたローブの切れ端はちゃんと役割

を果たしたようで、出血は止まっていた。身体の毒は抜けていないが全身がだるくてフラフラする。私、この特異能力無かったら死んでたなーと、そう思うほどの満身創痍な格好。しかも現在時刻、みんなが起き始めるほんの30分前だ。リーーこれはまずい。

私はバジリスクの牙を一つだけ引っこ抜き、グリフィンドールの剣を持って秘密の部屋を出た。浮遊魔法を使って再び2階のトイレへと戻りリーー血濡れた姿にマートルには悲鳴を上げられたがリーー出来る限りの速さで校長室へ行き、帽子を返して、あとは気力だけでフラフラと寮に戻った。当然ながらこんな姿見せられたもんじゃない。シャワー室に飛び込んで血を流し、ボロボロに汚れたローブは魔法で直した。傷口に包帯を巻いて、顔色以外は正常に戻ったところで、同室のアビーとサンドラが目を覚ました。

「おはよう、今日は早いよね」

「んく…あれリオ、顔色悪くない?」

「おはようアビー、サンドラ。ちよつと月ものが辛くて…。朝食はいらないわ、」

そう言つて布団に潜り込んだ。月一回の女の痛みは、二人も知っているだろう。「じゃあ食べてくるわね」と二人が出て行った瞬間、私はまた意識を失った。そうして授業が始まる5分前に起こしに来てくれたサンドラに「大丈夫」と口にし礼を告げる。今の状態でピアスはつけない、近くに花瓶に挿してあった花を一輪変身の術でピアスに変え、私は授業へと向かった。

「ねえリオ、顔色が悪いわ。本当に大丈夫なの?」

二限の呪文学に向かう途中、リリーが心配そうに聞いてきた。

「ああ友を気遣うその心!なんて優しいんだリリー!…と、まあ僕も心配だな。本当に体調悪そうだよ、リオ」

その隣のジェームズも私の顔を見て眉を顰める。リリーも今に至ってはジェームズに突つかかることはしなかった。

ヘラリと笑みを浮かべて「まあ大丈夫だよ」と言つても、皆の表

情は優れない。本当は顔色も魔法でどうにかしたいが、如何せん既に身体の毒の方でいっぱいいっぱいだ。これ以上は魔力が枯渇する。我ながらチートじみた力持つてると思ってたんだけど……バジリスクの毒、最強すぎるだろ。

「お前、朝飯も食ってなかったろ？」

「食欲なくて。女の子の日だからしょうがないよねえ」

「っリオ!!」

下品よ!と叱るリリー。けれど男性陣はこれでもう聞いてくることはできない。……ピーター、顔が真っ赤よ。ごめん

「なら……マダム・ポンフリーのところに行けば薬をもらえるんじゃないか？」

「確かにそうね。リオ、行きましょう。付いていくわ」

しかしそこで照れもしないプレイボーイのシリウスくん。冷静に対処法を口にするあたり手馴れています。

だけど残念ながらポンフリーのところには行けない。行ったら確実に嘘がばれる。しかも肩の大怪我に、身体中を犯された猛毒だー何があつたか100パーセント聞かれるだろう。しかも、今回の一件はダンブルドアにも内密だ。こんな命にかかる大怪我、ポンフリーが報告しないわけがない。つまりバレる。無理。

「……いいよりリリー。一人で行ける」

「何言ってるの!フラフラじゃない!」

「監督生がいなかったら先生に迷惑がかかるよ。だからと言ってジエームズ達と一緒にするのも気まずいし……」

「でも……」

「本当に大丈夫だから。じゃ、私行ってくるね」

心配そうなりリリー達を余所に、一人曲がり角を曲がる。壁伝いに廊下を歩くが、目の前が霞んだ気がした。あれ？

リリー達には申し訳ないが、ポンフリーのところへ行く気は毛頭ない。このまま寮に戻って眠ろうー

そう思ったところで、私の意識は遠のいた。

9話 不信

セブルスは奥の廊下を目にしたところで、一足を止めた。前方、中央。

あのシルエットは間違いない、リオ・タカノだ。反射的に眉が歪んだ。仕方ない、彼の過去の経験が己自身に訴えてる。一いつとここで会うことは百害あって一利なし。時間ロスだが、奴が通り過ぎるまでここで待とう。

セブルスはそう判断した。だが判断を下したところで一ぱたりと。まるで糸の切れた人形のように目の前の少女は倒れた。

「おい!？」

突然の事態に、さっきまでの考えも忘れ理央に駆け寄るセブルス。そこに横たわる彼女は顔色が異常に悪く、息遣いを荒かった。

「っなんて熱だ!」

これが人の体温なのかと、驚くほど熱い身体。間違いなく高熱で魘されている。

セブルスはすぐさま気を失った彼女を背負い、医務室へと向かった。

「まあ!どうしたんですその子は!!」

「マダム・ポンフリー、凄い熱なんです。早く、手当てを!」

「ええ!こちらのベッドへ!!」

マダムはスリザリンの僕がグリフィンドルのリオを背負っていることに一瞬だけ驚き、それでも急患だと理解したのかすぐさま処置へと入った。

「彼女、一体何が?」

「分からない……ただ、僕が廊下で見つけた時には倒れていて……」

「そうですか。…あなたは授業があるでしょう。心配でしょうが、ここは私に任せて教室に向かいなさい」

「…はい」

セブルスは、その言葉に――意外にも――後ろ髪を引かれた気がした。

彼にとって、確かにリオ・タカノは騒々しくて凶々しくて面倒な奴だが――嫌いじゃないのだ。むしろ、あまり人付き合いの得意ではない自分に（自覚している）ここまで話しかけてくる根性は見上げたものだし、なにより彼女は馬鹿みたいに自分を好き好き言ってくる。それに反応する自分をからかうところは憎らしいが――好意を向けられて嫌な気分はしない。

つまるところ、セブルスは友人としてそこそこリオを気に入っていた。本人には口が裂けても言わないが。

そんなリオの体調不良、普段笑顔ばかり見ているせいか余計に不安が心に残る。

だがここに残っていても自分にできることはない――そう自分に言い聞かせ、セブルスは医務室を出ようとした。

「……………、は…?」

「Msタカノ！気がつきましたか？ここは医務室です。あなたが倒れていたところをMr. スネイプが――」

「、帰り…ますっ!」

「な!?!Msタカノ!?!何を考えているのです！貴方は今しがた倒れたばかりなんですよ!」

「大丈夫です、問題ない、です…!」

「どこがで…――っ、何ですかこの怪我は!?!Msタカノ!!」

――怪我？

ドクリと、セブルスの心臓が嫌な音を立てた。

ベッドのカーテン越し、当然中は見えないが二人の口論する声だけは聞こえてくる。

どういふことだ。マダムの声は焦っていた、ではそんなに大怪我だというのか？何故？一体何があった？

「動いてはいけません！…こんな――こんな身体で！」

「なら、ならこの件について誰にも言わないで、ください！ダンプルド

アにも、皆にも、誰にも——！」

「貴方はなにをっ」

「——でなければ、治療は受けません！だから、だからどうか——」
「ツ——、わかりました。この怪我について誰にも言いません！ですからM s タカノ、安静にしなさい。すぐに腕の手当てをしますから」
ここで、声は止まった。

呆然とその場に立ち尽くすセブルス。彼には、リオになにが起きているのか、今なにが起きたのか、まるで理解できなかった。

セブルスの前で、リオはいつも元気すぎるほど元気で、うるさくて、笑顔で——。だから初めて聞いたのだ、あんな苦しそうな声を。焦ったような声を。悲痛そうな、悲鳴じみた声を——。

一度治療道具を用意するためであろう、ポンフリーがカーテンから出てくる。ポンフリーは、セブルスの姿を目に移すとすぐさま此方へ寄ってきて、追い出すようにドア口へと押した。

「さあM r s ネイプ。彼女が気づく前に早く出なさい。」

「ポンフリー、リオは一体」

「私からは何も言えません……しかし重体とだけは言っておきましょう。ですが、この件については他言無用です。彼女がそれを望んでいきますからね、さあ早く」

そうして、無情にも扉は閉められた。

セブルスはその場から動かない。動けない。ぐるぐると思考と感情だけが身体中を暴れまわる。——彼は、この渦巻く感情の行き場を失っていた。

10話 悪夢

【面会謝絶】

その四文字が、リリーの脳内を占めていた。

確かに、今日顔を会わせてからずっと顔色は悪かった。「今日はちよつとしんどい方みたい」なんて言っていたから、ポンフリーにちよつと薬を貰えば良くなるだろうって思っていたのに。

廊下で別れた後、リオは倒れたと聞いた。もしそのまま誰にも気付かれず、放置されていたらと考えるとゾツとする。無理矢理でもついていけば良かった、どうして一人で行かせたりなんか私はしたの、それでもリオの友達なの？

責任感の強いリリーは、後悔の念に蝕まれる。それだけじゃない、心に広がる気味の悪い不安、疑念。

ーねえ。あなた大したことないって言ってたじゃない。なのにどうして、面会謝絶なんてことになってるの？

「顔色が浮かないね、リリー」

「……………ポッター」

勝手にリリーの隣に座ったジェームズ。いつもなら此処で「勝手に座らないでちょうだい！」なんて怒声が飛ぶのに、今の彼女にその元気はなかった。ジェームズはリリーの空っぽなお皿を見て、「食べないの？」と口にする。リリーはそれに首を横へ振った。空腹は感じない。目の前に並ぶ美味しそうなご飯だって喉を通りそうにない。

「リオのことかい？」

「……………あなたも知ってるのね」

「夕食前にみんなと様子見に行ったんだけどね。マダムに追い返されたよ。おかしいよね、リオの言ってた通りの体調不良なら、面会謝絶なんかになつたりしないのに」

ジェームズはそう言いながら、テーブルの料理を少しずつリリーの皿へと盛り付ける。

余計なお世話だ、とりりーは思いながらも特に何かを言ったりはしなかった。

「リオは何か僕やりりーに隠し事をしてるんだ、気にならないかい？」
「……それを貴方に言っただうなるの」

「簡単さ、リオに会いに行くんだよ」

「ポンフリーが許さないわ」

「ばれなければいい」

「……ちよつと」

「食事を終えたらみんなでリオに会いに行こう。りりー」

ジェームズはそう言っただ綺麗に笑った。

その笑顔が普段とあんまり違ったものだから、りりーは少し瞠目し、そして小さく頷いた。

食事後ジェームズ、シリウス、リーマス、ピーター、りりーの5人はすぐに大広間を抜け、廊下を歩いていった。

「扉自体に鍵はかかってない。だから中にいるポンフリーの気を少し逸らして、その間に透明マントを被って潜り込めばいいんだ」

「ああー新作の出演だな」

「ちよつと、また危ないことをするつもりなの!？」

「今回の問題ないよ」

「ポッター貴方の言うことは信用ならないわ」

「大丈夫だよりりー、これは廊下で少し大きな音を出すだけだ。僕が保証する」

「………信じるわよ、リーマス」

「あれ!?!僕のとくと違う!？」

「っ貴方は自分の胸に日頃の行いを聞いてみなさい!!」

「こ、声が大きいよ二人とも!」

「兎に角、部屋に潜り込むところまではいいけどー問題はリオのいるベッドだな……」

医務室のベッドは全てカーテンで仕切られている。ジェームズ達が医務室にきたとき、ポンフリーはリオのいる場所を分からなくするためか全てにカーテンを引いていた。いくら透明マントを被つていても一人でに開くカーテンはおかしいし、一つ一つ確認している暇はない。

「入って左側の、奥から2番目よ」

「え?」

「セブが教えてくれたの。」

「はあ!?!」

「私たちと別れた後、廊下で倒れていたリオを医務室まで運んだのはセブなのよ。彼は私に、面会謝絶だって…教えてくれたの。」

「ならスニベリーは何か知ってるんじゃないか!?!」

「知らないって言うってたわ。嘘じゃ、ないと思う」

彼も何も知らないのだ、でなければあんな顔する筈がない。きつとセブルスはリリーに言う事で、リリーが何か教えてくれるんじゃないかと考えたのだろう。でもリリーも知らなくて、ただただ混乱と不安と疑問だけが残った。「あいつは今、面会謝絶だ」そう言ったセブルスの顔は、とても苦し気だった。

「ま、これから本人に聞けばいいだけさ」

分からないことを知るために、僕らはリオに会うんだろ? そう言うってジェームズは笑った。

左側奥から2番目。

廊下で響いた轟音に「何事ですか!?!」と飛び出して行ったポンフリーを横目に、5人は難なく医務室へと侵入した。リオのいるベッドに近づき、思い切りカーテンを開ける。

「リオ?」

「…熱があるみたいだね…苦しそうだ」

ーリオは眠っていた。しかし穏やかな呼吸音は聞こえず、荒々しい呻き声だけが部屋に響く。額に浮かぶ多くの汗は高熱に魘されて

いるようで、時々掠れた呻き声を漏らした。

「風邪、かな?」

「どうだろう、ただの風邪にしては高熱だし何か感染症とかの可能性もあるよ」

「ったく、なにが生理だー！ーッおい！見ろ！これ!!」

「え?」

シリウスの焦った声に全員がそちらに視線を向ける。彼の手元、少しめくり上がった布団の下に見えるー！ーリオの腕。

「なに、……………この包帯」

呆然と、リリーが呟いた。

肩から腕にかけて巻かれた包帯。何重にも巻かれている筈なのに、その白色は赤く染まりつつある。さつきから斃されているせいで、リオは眠りながら身体を動かし、結果的に傷口を開くという負の連鎖が起きているのだ。

シリウスは、恐る恐るそつとリオの腕に触れた。ー！ーなんだよこれ。こんな大怪我、一体なにをしたら出来るんだ。昨日までは普通だった、なのにどうして。いや、それだけじゃない。リオは、こいつはこんな大怪我をしても、朝まで俺たちの隣で笑っていた。…なんてことないように振る舞って、ふざけて、喋って、怪我を、痛みを隠して、笑ってやがったんだ!!!

「っつ、ふざけんなよッツツ!!」

「シリウス!?!」

「馬鹿！リオが起きる!!」

「離せリーマス！起こせばいいだろ!?!理由を聞くために来たんだろが!!」

「冷静になれ！この状況で、リオがまともに話せると思うのかい?」

「ー！ッ!」

「今僕ら出来るのはリオが早く元気になるよう、彼女を想うことだよ。」

リーマスの言葉に、重い沈黙が流れた。自分たちはなにもできない、なにも知ることができない。

苦しげな友人の表情に何も出来ないのだ、と。リリーはリオの額に手を当て空いているベッドの隙間に座り込む。リリーやるせなさに、涙が浮かんだ。

「……………り、り……………」

その時、凍りついた空間に響いた小さな声。リリーは咄嗟にリオの顔へと顔を向ける。目が、合った。けれどどこか虚ろな目で、そこから溢れるように雫が流れている。リリー泣いている。リオが、泣いている。

「リオ……」

「……………き、てる……………よか、……………よかった、あ……………」

「……………リオ？」

「みんな、よかつ、……………」

シトシトと泣き続けるリオ。その表情は安堵したように、喜びにうちひしがれるように、此処にいる子供らにとって、理解できない言葉を告げる。全員が分からない、と顔を見合わせ、不安そうにリオの顔を覗き込んだ。

「おいリオ、聞こえるか？」

「……………いじよ……………ぶ、だから、」

「リオ！」

「……………まも、……………」

「え？」

「……………から……………」

そう残して、再び目を閉じたりオ。

先ほどとは違い、今度は安らかな寝息を立ててスヤスヤと眠る。恐らくリリー今のは寝言だった。高熱で魘されていた先で、なにか悪夢でも見たのかもしれない。でも、そう一言で片付けるには真に迫った表情で。

リリー彼等はなににも分からなかった。

此処へ来たのは分からないことを知るためだった。けれど、彼らが得たのは多くの疑問と、何もできない無力感だけだった。

11話 アフターケア

最初に見たのは家族だった。

しくしくと涙を流す母親、その肩を抱く父に、二人の後ろで佇む兄。彼等の目の前にはわたしの写真があった。ー好きだった歌手のCD、好物のチョコレート、お気に入りだった作家の小説、はたまたアニメのブロマイドまで、まるで供え物のように置いてある。理央、と父が震える声で私を呼んだ。父は厳格な人だった。泣く姿なんて生まれてこの方数回しか見たことない。ただ、寂しがりやな人だった。実家に帰る度に「まだいい人は見つからんのか」と聞くくせに悲しい顔をするから、母とこっそり笑ったほどに。

暗転。

次に見たのはあの男。

男は杖の照準をジェームズへ向ける。私はこの光景を知っていた。この先に起こることも。

響く怒声、だけどろくに抵抗も出来ぬまま緑の閃光がジェームズに当たった。ーやめてー廊下で事切れた彼をまたいで、男はリビングへと進む。ーやめてお願いー赤ん坊を抱いた彼女は、男に命乞いをし、けれど、奴は嘲笑うかのように、呪文を

ーーりりー。

名前を、呼んだ。目の前に彼女がいた。彼女だけじゃない、みんないる。温かい、生きている。ごめんね、大丈夫よ。絶対にあんな風にさせない。だからお願い、泣かないで。みんなみんな、笑っていて。

目を覚ましたのが5日後。

残り2日は絶対安静。

こうして私は無事日常へと帰ってきた。

「もうっ、心配しちゃったじゃない！一週間も医務室に籠るなんて」
「インフルエンザだった？馬鹿ねえもう」

「いやー！私自身もビックリだよね。でも、アビーやサンドラにま

で移ってなくて良かったー」

きやいきやいと寮の談話室で激励を受ける私は、この一週間インフルエンザに苦しんでましたーってことになっているらしい。そんなわけで私はノリノリでポンフリーがついた嘘にのっかかる。熱つてのは間違いじゃないんでね、とかウイルスに感染してたってほんただし。ただちよつとグレードが、まんじゅうと高級マカロンくらい差があるだけで。え？分かりづらい？

「リオ、もう大丈夫なのかい？」

「あ、うん、リーマス。もう平気〜」

「心配したんだよ」

「やっだリーマスやさしくい！」

バシーンと近所のおばさん宜しく彼の肩を叩いてみる。「痛いよ」と笑うリーマスはどこか影がかかっていた。まだ満月には遠い筈だけれど……？

「皆もただいま〜」

リーマスの後ろにいるジェームズ達にも声をかける。その隣に何故かいるリリーに首をかしげたが、気にするほどでもない。もしかしたらここら辺で二人の関係が変わり始めたのかなーとか思っただけで。ーー反応がない。なににみんな！私がいなくて寂しかったでしょ？寂しかったよね？もしかしてみんなとは仲の良いと思っただの私だけ？無反応とか新手的いじめ!？それとも反抗期？

「リオー」

「え！はい！なにシリウス」

間。

「……………心配かけんな」

「あ、うん、ごめんね」

なんかわたし。すげー心配かけてたみたい。

適当に気遣う言葉とおかえりーとか貰えると思ってた私は、皆の反応に拍子抜けした。ジェームズもシリウスも眉を顰めてるしリーマスは苦笑いだしピーターは不安そうにしているしリリーなんて目がウルウルしてる。いや、インフルエンザよ？んな大袈裟な。

「まっ、私はこの通り元気になったからみんな元気だして」
だからこの一週間分の授業ノート、貸してください。

「どこがインフルエンザよ」

「最近のインフルエンザは毛穴から血がでるらしいよ」

「なにそれ。馬鹿じゃないの?」

「手厳しく」

「……あんたあれでよく生きてたわね」

「しぶとさが売りのわたしだから」

「ふんっ」

「これお礼のお花。此処に置いとくね、じゃ」

「ちよつと」

「ん?」

「もしあんたが死んだら、一緒に此処に住ませてやってもいいわ」

「あはは!……ありがとう。マートル」

12話 かちかち山

「わあたしもひとりぐれんらくう船にのりい〜」

あちこち散らかるガラクタをぽいぽい投げて辺りを漁ってみる。右側から手当たり次第に漁り始めて今2／3くらい進んだ。目的の物はまだ見つからない。

「凍えそうな鵜見つめ泣いていましたああ〜」

ちなみに私、一人作業をするときは鼻唄を歌うタイプだ。掃除機とか洗濯とか無意識に歌っちゃう奴、心当たりがあるそのあなた、私と友達になれます。

「つがるかい〜きよう、ふゆげ〜しきい〜」

ーかれこれ40分程度、流行のポップな曲から恋愛ソング、アニソン、演歌と歌い続けてそろそろ喉が限界を迎えかけてる。げほっ。なんか本の中で場所の描写あった気がしたけどなく。そんな細かいところまで覚えてないのだよ……。ハリーは速攻で見つけてたみたいだけど。主人公補正、わたしも欲しいです。

「リオ」

「シリウスじゃん、どうしたの?」

背中ごしにかかった声に、振り向く。

別段驚かない。だって気配で近づいてきてるの、知ってたので。

「なんだよこの部屋、埃っばいな」

「ちよつと捜し物をね」

「何捜してたんだよ」

「シリウスこそ何しにきたの?」

そう言うとシリウスは一瞬躊躇い「お前が、また一人でいなくなつたから…」と口にした。

目を離したら駄目な幼稚園児かなにかですかわたしは。

ーそう言いたいけど我慢我慢。ぐつと堪えて「ごめんごめん」と

彼の肩に手を乗せる。インフルエンザ事件からシリウスに限らず、仕掛人とリリーは私に対して過保護になった。というより、一人にして廊下で倒れたことを気にしているんだろう。元より医務室に行く気がなかった故、気にされる必要なんてこれっぽっちもないのだがそれを言える筈もなく。仕方なく甘んじて彼等の心配を受け取っている。いやー愛が痛いです。

「じゃあ皆のところに戻ろっか」

「捜し物はいいいのか？」

「うん」

「……俺に見られたくないのか？」

おいしい。見られたくないんじゃないんだな。

「わたし、捜し物するとき歌っちゃうんだよね」

「は？」

「歌、聞かれたくないじゃん。恥ずかしい」

そんなかんじ？でシリウスを丸め込んで必要の部屋を出た。なんだか必要の部屋⇨シリウスと遭遇の図が出来上がってる気がする。この遭遇率、乙女ゲーかしら？

「おおりオ」

そのままシリウスと二人で談話室に戻るかと思いきや、なんとまあ廊下であらぬ人間に声を掛けられた。顔を会わせて、目を見て、ーバレたな、と察する。

「校長先生」

そこに居たのはダンブルドア校長。シリウスが驚いて私を見ているーいや私だつて驚いてるよ。顔に出さないだけで。

時間の問題だと思ってたけど意外とはやかったなーなんて思いつつ、隣のシリウスをどうしようかと考えたところで、相手から思わぬ助け船が。

「実は、お主の教えてくれた”ニホンチャ”が手に入ったのじゃが、ど

うも儂には淹れ方が分からなくてのう」

「教えましたっけ？わたし、寿司やそばが食べたいって言った思い出はありますけど。」

相手の狸加減に呆れと尊敬を感じるが、そんな表情は欠片も見せず、こちらとてにつこり笑う。

「ああ、それなら是非私がお淹れしますよ」

「ほう。それはありがたい」

助け船に乗らない手はない——泥船ではないことを願うが。

訝しげにこつちを気にするシリウスを置いて、私とダブルドアは校長室へ足を向けた。部屋に着くまでお互い無言、中に入ると机の上には本当に日本茶——正確には緑茶の御茶があった。緑茶なんて久しぶりだ。地味に嬉しい。

「——さて。お主——一週間入院してたようじゃのう」

「ええ、インフルエンザにかかってしまった」

御茶の準備もそこそこで話を切り出してきたジジイに、何気なく対応する。

「ポンフリーもそう言っておったな。じゃがのう、それにしても少し不可解な所があるのじゃよ」

「なんですか？」

「ポンフリーはここ数日、毒消しの薬を作っていたそうじゃ」

「最近のインフルエンザは強敵ですから」

「しかも大量の傷薬と包帯も発注したとか」

「悪戯仕掛人たちの被害者も増えてきましたしねえ」

「血濡れの包帯を抱えた姿を見たものもおる」

「全く彼らも困ったものですねえ」

「さてリオ」

「はい」

「——わしに何か言わなくてはならないことはないか？」

「御茶用意するなら急須と湯呑みも欲しいです」

沈黙。

「今回はティーポット代用ですが、本来日本では急須と湯呑みという

専用機器を使います。次回は茶菓子と共にご用意願いますね、校長先生」

やっぱ日本茶は湯呑みじゃなくちゃねえ。ティーカップで緑茶つてどこか味気なさを感じてしまう、これが日本人の風情なのです。

「リーリオ」

ーとまあ。こんなことで流されてくれるわけなく。分かってますって。

さつきまでとは違い、ダンブルドアは咎めるような鋭い眼光を向けていた。…多分そこらの人達だったら竦み上がるんじゃないかな？ そんな表情。ダンブルドアを、この人を、稀代の偉大な魔法使いとして、まるで神様のように崇めたてる人達にとってこの瞳は怖かろう。でもわたしにとってダンブルドアはただの人で、ただの狸爺で、ただの優しいおじいちゃんだから。ちっとも怖くないーだってこの世界は、もつと怖いもので溢れている。

「ー別に。ちよつと”やんちゃ”しただけです。気にしないで下さい」

その言葉に、ダンブルドアは軽く目を見開いた後、諦めるような深い溜め息を漏らした。この仕草はリーリオのものとよく似ている。でも、瞳に映す色だけは違って。わたしはこの瞳が苦手だった。だから黙ってようとしたのに、大失敗だ。ー憐れむような、痛々しいものを見るような、そんな色を宿して、ダンブルドアは私を見ていた。

「じゃがその姿を見る限り儂との約束は破ったようじゃのう」

「え？」

「ピアスが外れておる」

おっふ。

分霊箱大搜索の保険に外して、途中シリウスが来たから、つけ直すのをサッパリ忘れてた。だからだと冷や汗が流れる。思い出すのは

以前ホグワーツに通いたいと駄々をこね、交換条件にこのピアスを貰った時の約束事――有事以外は絶対外すな。破れば即強制執行”。

「い、今からつけまゝす……それで……」

「駄目じゃ」

「ええっ」

ガーンとリアクションをとるも束の間、ダンブルドアは杖を振るつた。ポケットから独りで出てきたピアスは私の右耳に止まり動きを止める。カチリと小さな音を立て、装着されたソレに、妙な違和感を感じてしまった。……ヤな予感。

「そのピアスはもう、お主自身では外せぬ」

「は!?!」

「…これで少しリオの”やんちゃ”が落ち着けばよいがのう」

ダンブルドアはそう言って何故か私の頭を撫でた。

酷く悲しげな瞳をしたまま。

13話 嘘つき同士

綺麗な笑顔だと思った。

不自然なところなんて欠片もない。

「ああ彼女はこんな風に嘘をつくのか、と。」

その笑顔があんまり普通だったから、僕も僕以外のみんなもリオになにも聞けなかった。多分聞いたとしても、何も答えてくれないのだと分かってしまったから。「それくらい、」いつも通り”の笑顔だった。

また、だ。

また僕は知らなかった。

彼女とはもう5年の付き合いなのに、知らない事が多すぎる。

例えば彼女の体質。

僕の狼化を止めた、あの不思議な魔法。僕らと気質の違う、魔獣や闇の勢力に狙われる魔力。確かにそれは強大な力だったけれど、実際は諸刃の剣だった。「ああの日、あの後彼女は倒れたらしい。聞く、魔力を使いすぎたことが原因だった。狼化を抑えられる力、僕にとっては喉から手が出るほど欲しい。でも、その為に友達を傷付ることなんて出来ない。それならあの暗い部屋で一人耐えた方がマシだ。後日彼女を説き伏せて、僕のために力を使わないことを約束させた。リオは納得しなかったけど、僕だってこれに関しては引けない。それに、もう充分救われたから、これ以上君に苦しんで欲しくなかった。」

例えば彼女の嘘。

僕は”あの怪我は魔獣に襲われたのかも”と考えていた。彼女の体質によつて、狙われたんじゃないかって。それなら僕達に怪我を秘密にする理由も分かる。でもそれにはリオがピアスを外す理由と、魔獣に襲われるような場所へ行った理由が必要だ。

「僕らが」たまたま”忍びの地図を絶対に見ない日に限って、そんな場所へ行った理由が。」

彼女には秘密が多い。

僕も秘密を持つ嘘つきだから分かる。暴かれるのが怖い、知られることが恐ろしい、ローそんな恐怖と僕ら嘘つきは常に闘っている。だから無理やり聞くことも問いただすことも出来ないんだ。

でも、僕は秘密を持ち続けるのは気力が必要で、嘘をつくのは心苦しいことだと知っている。周りを欺き、時には自分自身すらも騙し通して、偽りの自分を演じている。それは、とても息苦しい。心を擦り減らして罪悪感と戦い続けるのは、想像以上に孤独なんだ。

だからこそローその秘密を受け入れられたときの喜びと幸福は計り知れない。僕は、その幸せも知っている。

僕はね、リオ。

君をもっと知りたいんだ。

だって君は僕のかげがえのない友達だから。

そうして、僕はその日また彼女の知らないところを知った。

「僕に触るな!!!この穢れたローツツ?!?!」

ローローこんな風にブチ切れるのかど。

14話 穢れた血事件

最初の被害者はセブルスだった。リリーへの暴言途中に容赦のない蹴り。しかも無言ときた。その悲惨すぎる？光景に呆気にとられたジェームズとシリウス。そんな訳だから無駄にイイ笑顔でこつちへ来る理央に警戒を持てなかった。放たれた股間への攻撃に、二人は声にならない声をあげる。

こうしてものの数秒で、高野理央は同学年男子3人の尊厳とプライドをズタズタにしたのだった。

ーあれは痛い。

リーマスの口元が強ばった。

凡そ男なら誰でも恐れる攻撃だ。物理的な痛み以外に、精神的なダメージだって計り知れない。リーマスは引きつった顔で地面にひれ伏すジェームズ、シリウス、セブルスを見た。

ーあれは怖い。

ピーターは震えた。

床で悶える三人も気の毒だが、それ以上に目の前に立つ彼女が怖い。今なら闇の帝王より怖いかもしいない。だって、リオ、怒ってるー大概のことを笑って許すあのリオが、本気の本気で怒っている。

ーすごい。

リリーはうつかり感心した。

本当にやる人、いるんだ。以前父にく痴漢に遭ったときの撃退法>として教わったことはある。でも本当に実践される瞬間を初めて見た。彼女はさっきまで自分が幼馴染みに言われかけていた暴言も忘れ、しみじみその実践法を目に焼き付けた。

「ねえセブルス。私、貴方が闇の魔術に興味持とうが学ぼうがどっちだっていいって思ってたわ。だってそれをいつ、どう使うかはその人によって違うから。誰かを傷つける為なのか、誰かを守る為なのか、

そこの馬鹿二人みたいに闇の魔術を使わなくても人を傷つけることなんて簡単に出来るしね。だから、私は貴方が自分自身やリリーを守守るために、強くなるために学んでいると思ってた。ーでも、違ったのよね？その言葉の意味、分かっているんでしょう？あなた今、マグル生まれを、”リリーを殺す”ってそれと同等の言葉を口にしようとしたのよ。」

「ジエームズ、貴方のリリーへの愛は凄いと思う。元来、人が人を愛し続けるのは難しい。だからこそ、その年でここまでの愛を持てる貴方を、私は美しいと思うし羨ましくも感じるわ。でもね、今の貴方の振る舞いは愛ではなくーただのエゴよ。貴方は愛する人の気持ちを考えていない。自分勝手な都合で、結果的に相手を傷つけることに気づいていない。貴方は、相手の意志や想いを尊重せず自分の願望を押し付けているだけよ。ーそれは愛とは呼ばない。意味を履き違えないで」

「シリウス、わたし何度も言ったわ、決めつけるのが貴方の悪い癖だつて。マグル生まれただけで嫌悪する純血主義のスリザリんと、スリザリンってだけで敵とみなす貴方に、どれ程の違いがあるのかしら。貴方は虐め紛いの悪戯を、正義のつもりでやっているんでしょう？自分が正しい、相手がおかしいって。ただそれだけで相手を暴力と中傷で貶めている。ただ貴方自身が、気に入らないものを排除しているーとんだ正義だわ。自分のしていること、貴方の大嫌いな闇側の人間がしていること、いつになったら同じだって気づくのかしらね。」

三人は床に伏したまま顔を上げない。それは痛みからか恐怖からか、はたまた残ったプライドからか。

入学して5年目、今までジエームズが悪質な悪戯をしようがシリウスが慇懃無礼な振る舞いをしようがセブルスが苛立ちに任せた攻撃呪文を使おうがー理央は決して怒らなかつた。注意をしたり諭すことはあつた、でもこんな、相手を淘汰するような怒りは見せたことなどなかつた。

ここにきて初めて理央は怒りを露にし、今まで見せたことのない絶
対零度の冷たい瞳で三人を見下ろしていた。

「世の中には知らなくていいことと、知らなければならぬことと二
種類ある。あなた達のは確実に後者よ。――己を恥じなさい。既成
概念と思いつきで判断して、相手を知るための努力を何一つしなかつ
た。相手の痛みを考えようとしなかった。その愚行は、いつか必ず
身を滅ぼすわ。私は貴方達にそんな大人になって欲しくない。」

そこまで言うと、用済みとばかりに理央は三人に背中を向けた。
「行こうリリー」と声をかける。そうしてひれ伏す三人と、凍りついた
二人を他所に、リリーと理央はこの場を去った。

「…もしまだ貴方達が馬鹿なことを始めたんならその息子、今度は再
起不能にしてやるから覚えておきなさい。」

――身が縮こまるような、捨て台詞を残して。

後にこの光景を見ていた一部の男子生徒によつて悪魔だの鬼畜だ
のと噂されるようになるのだが、理央にはどうでもいいことだった。

15話 穢れた血事件 after

結論から言うと、あの時は機嫌が悪かった。

理央はバジリスク殲滅で2巻、髪飾り粉碎でもう2巻分は巻けると思っていた。でもなかなか髪飾りは見つからない、どう頑張っても自分でピアスは外せない、その足枷で理央はイライラしていた。積み重なった鬱憤に加えてあの現場ープツツンしても仕方がない。

こっちは苛々してんだよ！クソくだらない喧嘩してんじゃねえ！何回言ったら分かるんじゃボケエエ!!

で、ああなった。ただそれだけ。

あの惨状は彼女の完全なる八つ当たりだった。

「……………さみしい」

あの事件から既に3ヶ月。理央はいじけていた。

「いいじゃない、これを機にポッター達と縁を切っちゃえば」

「リリーが冷たい。…セブルスも目エ合わせてくれないし。癒しが足りない…」

「私にもセブは目を合わせてくれないわ」

クリスマスパーティーを終え、クリスマス休暇に入り、休暇が終わった現在でも未だジエームズ達ともセブルスとも冷戦状態が続いている。理央はしよぼくれていた。自分が悪かったとは米粒程度しか思っていないが、彼等と仲良く出来ないのはとっても辛かった。

対して、リリーはケロっとしている。ジエームズ達は元より、しかしセブルスに至って彼女は当事者だった筈なのに。ー確かに、リリーはセブルスの暴言に傷付いたし怒りもした。でも、自分が傷付いた以上にリオは怒り、その報復をセブルスは受けたのだ。それもかなりエグい方の。自分以上に他人が怒ってくれるのならば自身の怒りは鎮火する。

とどのつまり、理央の八つ当たりはリリーの心境に大きく影響を与

えていたのだが、理央は知るよしもない。

「リリーにも?」

「ええ。目線は寄越すくせして、こつちが見ると目を逸らすの。……そろそろ潮時ね」

「えっ」

「セブと直接話してくるわ。」

そしてあの日以来、セブルスはリリー達をチラチラ見ては目を逸らす。その曖昧な姿にリリーも鬱憤が溜まっていた。無理もない、元々正義感が強い、何事にも白黒つけたい性格なのだ。

「…大丈夫?」

「ええ、前々からきちんと話さなきゃと思ってたもの。リオは闇の魔術を学ぶこと自体は悪いことじゃないって言っていたけど、闇側の人間と関わりを持つのは悪いことだわ。……あの人達とは縁を切って貰わなきゃ」

「あー確かマシビエールとエイブリーだっけ?」

「マルシベールとエイブリー、よ」

セブルスとスリザリンの彼等は仲が良い。そしてあの二人は純血主義で質の悪い闇の魔術を面白半分で生徒たちにかけているという。リリーはセブルスが何故あんな人達と交流しているのか分からなかった。

「ねえリリー、友達を諭すことは正しいよ。でも縁を切るか決めるのはセブルスだから。そこを忘れないようにね」

「……リオはセブがあんな人達と一緒にいてもいいっていうの?」

「いい…とは思わないなあ。でも、私達がそう思ってもセブルスは違うかもしれないでしょう?もしかしたら私達が知らないだけで、彼等にも良いところがあるかもしれない。リリーがセブルスを心配してるのは分かるよ。でもね、心配だからって相手に強要したりするのは駄目。心配って言葉は免罪符にはならないから」

「……………」

「セブルスは馬鹿じゃない、ちゃんと自分の目で相手を見れるし考える事が出来る人だよ。まあ…ジエームズ達に対しては違うけど。そ

「これはリリーが一番知ってるでしょ？」

「…ええ」

「だからちゃんと聞いてきて。セブルスが何を思っただけの魔術を学んでいるのか、何故彼等と仲良くしているのか、…その上でリリーが何を思ったのか、セブルスに伝えてあげて。大丈夫、二人はきつと分り合える。」

リオは時々やけに大人びたことを言う。リリーはそれが好きでもあったし嫌いでもあった。だって、大切な友達がまるで遠い存在のように思えてしまうから。

「で、いつセブルスと会うの？」

「え？…ああ今日の夕食前よ。もう空き教室に呼び出してあるわ」

「そっかー。じゃあわたし今日ぼっち飯か〜」

「……………なるべく早く帰ってくるわ」

「えへへ待ってる〜」

でも、リオのこういうところで変に甘えてくるところは好きだ。自分が特別な友人だと、実感できる。リオは誰とでも喋ったり仲良くするけど、二人組のペアや夕食なんかは必ずリリーと取っていた。リリーにとって親友と呼べる人を挙げるのなら、それは理央だろう。そんな理央がリリーの背中を押してくれている。

大丈夫。私とセブは、こんなことで壊れるような弱い繋がりにじゃないーきつと分り合える。

リリーもまた、理央と関わる中で、逞しく凶々しく成長していた。そうして夕食時、リリーとセブルスが不在の大広間。話し合いが長引いているのか、二人はまだ姿を見せない。悪戯仕掛人たちは少し離れてポツチ飯をする理央は、モソモソと咀嚼しつつチラチラ扉を気にしている。そんな中で乱暴に扉が開かれた。だけど、そこにいたのは理央の待ち望む人間ではなくー

「た、大変ですーヴァジュラが…地下に、侵入して…!!」

理央は思ったーあれ？そのイベントはやくね？と。

16話 仲直り①

ざわざわと辺りが騒がしくなる。皆がなにやら怯え、泣き出す子ま
でいた。先生達も顔色が悪い。全員が全員、パニック状態——大広
間は恐怖で支配されていた。

「ヴァジュラってどんなのだっけ？」

「だけど、正直ヴァジュラがなんなのか分からない私はイマイチその
波に乗れなかった。授業でやった気はする。ただ自他ともに認める
防衛術以外みそかつすな私は覚えてなかった。一人だけ取り残され
た気分が地味に寂しい。どうせ侵入するならトロールにしてよ！そ
れなら分かるから！」

「そんな私を他所に、我先にと逃げ出す生徒たち。見かねたダンブル
ドアは、一喝しすぐ様指示を出した。」

「監督生は自寮の生徒を連れ、寮に戻るのじゃ。決して一人で勝手な
行動をしてはならんぞ」

「……………最後の一言は何故かわたしに向けて言われた気がする。
気のせいかな。ええー私ってそんな危険に突っ込むキャラですか？
んな馬鹿な、座右の銘は漁夫の利です。」

「ところがどっこい、偶然か必然かこの大広間にリリーとセブルスが
いない。まるで賢者の石のハーマイオニーの役位置だ。正直、嫌な予
感がする。」

「私は先生達の目をすり抜けて、こっそり大広間を抜けたー」

「っ!？」

「ところで肩を捕まれたような感触を受けた。」

「物凄く驚き肩を見るが、そこにはなににもない。」

「……………え？幽霊？」

「リオ」

「……………ジエームズ」

「なんっおま、透明マントかよ〜〜。びいくりしたあ〜。もう心
臓バツクバクだよ！」

「気まずそうに目線を逸らすジエームズとシリウス、その横にピー

ター、リーマスがいないのは監督生だからかな？ 兎も角この三人もわたし同様に大広間を抜け出してきたようだった。

「…君は、何処に行くつもりなの？」

「リリーが空き教室にいるの。ホグワーツに魔獣が侵入したって知らないから、教えてあげようと思って」

「一人で行く気かよ…」

「危ないよ、先生と一緒にの方が…」

「先生達だって人手が足りないだろうし…直ぐ済むから大丈夫よ」

三人と会話するのは本当に久しぶりだった。ぎこちなさは感じるが、久しぶりに話せたことにわたしの頬はだらしなく緩む。そんな私にジェームズとシリウスはどう反応したらいいのか分からないのか、頻りに目を泳がせていた。

「リリーがいるなら僕も行くさ」

「…俺も行く。」

「あっほんど？ じゃあ忍びの地図でリリーの場所確認してくれない？ セブルスも一緒にいるから」

「はあ!？」

「え?」

一人だけ反応がずれたピーター。可愛いく久しぶりの癒し。そんな風に考えてたらジェームズが私の肩を驚掴みしてきた。物凄い剣幕で、力も強くて若干痛い。おい、どうした。

「どうしてあの二人が…あいつがまたリリーに何か言ったら!!」

「その件でリリー自身が話したいと、セブルス呼び出したんだよ。その結果何言われようが何されようがリリーの責任、少なくとも私達が出ていい幕じゃない」

「…っ…ふざけるな!! リオはリリーが傷ついてもいいって言うのか!？」

「そうじゃない。リリーはセブルスと分かり合うために一歩踏み出したってことよ。それはとっても勇気のいることなの。私達が邪魔しているものじゃない。…言った筈よ、”押し付けるな”と」

そこで漸くジェームズは押し黙った。

おつといけない。このままだと前の二の舞だ。

齒噛みするジェームズを他所に「兎に角、リリー達のところに行かなきゃ」とシリウス等に声をかける。地図によると、どうやら変身術の教室にいるようだった。駆け足気味で教室へと向かう。静かな廊下に響く人数分の足音。全員無言の微妙に重苦しい空気。――気まぜい!!

「……まだ怒ってるの?」

「…怒ってるのはリオの方だろ」

「失礼な、私は怒ってないわよ」

返答したのはシリウス。

ちなみに私はほんとうに怒ってない。八つ当たりはしたけど。

「暴力を使ったのは悪いと思ってる、ごめんなさい。でもああでもしなきゃ三人とも止まらないと思ったから」

「……チツ」

「スニベリーに対しては、リリーにあんな事言ったんだからいい気味だったよ」

「セブルス、よ。ジェームズあなたまだそんなこと言ってるの? 私は貴方達とセブルスが良い友達になれると思ってるのに」

「はああ!? そんなわけないだろ! あいつは闇側の人間だ!!」

「だからそれは既成観念ってね。そもそも、私が闇側の人間と関わるわけじゃないじゃないー遠くない未来、あなた達の敵になる奴等なんかと。」

隣でヒュツと息を飲む音がした。私としては今更これ言う必要ある? 的なノリで吐き捨てただけど……ええー、まさか気付いてなかったの? 私普段からあんなに愛を提供してたのに (自己満)

「私はね、みんな大好きなの。そんな私が、あなた達の不利になるようなこと、絶対にしない」

これは絶対条件、わたしの揺るぎない一線だ。

全てに於いての念頭といってもいい。なによりの最優先事項。この子達が健やかに強く逞しく成長できるように、だって子供を守るのは大人の役目でしょう? 」

「……ははっ」

「どしたの？」

「…いや、君はそーゆー子だったなって思い出しただけ」

「？」

「……………はあ。僕の負けだよ、リオ」

なんか知らんがわたしは勝つたらしい。

ジエームズは諦めたように、脱力したように、でもなにかに喜ぶような優しい笑みを浮かべていた。

「……まで強烈な告白されちゃあ仲直りせずにはられないね、そう思うだろう？我が友パッドフット」

「……………ああ」

「そんなわけだから仲直りしてほしいな。リオ」

「喜んでだよ」

満面の笑顔で差し出された手を握る。ジエームズは照れたように、シリウスに至っては顔も見せてくれなかったけど、二人ともわたしとは違うゴツゴツした男の人の手をしていった。

5年前とは違う、成長した手。この先も子供達は成長して、この大きな手で色んなものを掴んでいくのだろう。生きて、生きて、幸せな未来を得られるように……その為ならわたしはなんだって出来る気がするんだよ。

17話 仲直り②

「リリー！セブルス！いる!？」

「!!」

「リオ！」

「……………お邪魔しました」

理央は勢いよく開けた扉をそつと閉めた。後ろにいる仕掛人（主にジェームズが）何事かと覗こうとするが全力で阻止する。理央は焦っていた。ーだってリリーとセブルスが抱き合っていたのだ。え？まさかのセブリリ？最早ハリー産まれないじゃん。

「ちよつ、リオ！なんで閉めるの!？」

「何も見てない何も見てないよ」

「あからさまに目を逸らしてるけど!？僕のリリーが!!」

「……………誰があなただよ、」

リリーつて魔法で分裂とかしないかなあ。理央が割と本気で考えてたところで、後ろの扉が開いた。ひよっこり顔を出したりリリーが少し赤くなった目元でジェームズを睨む。夫婦漫才（仮）が始まる前に理央はリリーに声をかけた。

「リリー、話せた？」

「……………そうね、全部が全部納得できたわけじゃないけど」

「うん」

「……………でも、セブは変わらず私の大切な幼馴染みよ」

そう言つて、リリーは目元を和らげてそれは綺麗に微笑んだ。隣のジェームズが見惚れてるのを他所に、なんだかんだで心配していた理央はそこでやつと胸を降ろす。

（“幼馴染み”か、どうやらまだハリーの道は残されてるようです。頑張れジェームズ。）

リリーが大丈夫なら今度はコツチだ。

理央は扉から奥を覗き、セブルスを見る。笑顔で手を振る理央に、ギョツとした顔のセブルスはすぐに目を逸らした。「セブルスー」次は声をかけてみる、無視だ。「セブルスさーん」近寄ってみる、顔すら

見ようとしなさい。「スネイプ先生」徐に彼の髪を三編みにしてみる、手を叩かれた。

「めんどどくさ!!」

「貴様なにをする!!」

うっかり頭を叩いたら倍の力で殴られた。

「いった!!酷い!殴ることないじゃん!」

「お前が最初に殴ったからだろう!!」

「殴ってないもん叩いたんだもん!」

「屁理屈を言うな!!」

「さっきまで拗ねてたくせに!!」

「拗ねてなどいない!!」

「うえーんりりー、セブルスが酷いよー」

「泣き真似をするな!!」

「ばれた?」

「開き直るなあああ!!」

あつはつはーと満面の笑顔を浮かべる理央にセブルスは怒髪天で掴みかかる。そんな、いつも通りの光景にりりーは安堵したようにホツとした表情を浮かべた。対してジエームズは複雑そうにシリウスは不機嫌そうに眉を顰めている。これもいつものこと。ちなみにピーターはオロオロしていた。かわいい、「何処を見てる!」理央が余所見してたらまたセブルスに頭を叩かれた。

「……………それで何の用だ」

「あ、うん。なんかヴァジュラ?がホグワーツに侵入したらしくて」

「なっ!?!」

ここにきてやっと本題。理央の発言に驚き、おののくセブルスとりりー。

「そういう事だからりりー、僕達と一緒に寮に戻ろう。」

「え、ええ……。でもセブが…」

「こいつはスリザリンド。俺達とは方向が違う」

『じゃ、セブルスは私と寮に行こっか』

「…りオもグリフィンドールだろ」

『だからセブルスを送ったら寮に帰るんだよ』

「はあ？」

「お前についてこれられなくとも一人で僕は帰れる」

『またまたく照れ屋さいたたたたつ足、足、足踏んでる！』

一触即発とまではいかないが、安定の険悪ムードな三人。ほんとはくやるよなあ。懲りてないし、もう面倒くさい。理央が顔に出さずとも心の中で呆れたところでー

背中に強烈な悪寒が走った。

「ひっ…!!」

「?どうしたんだよ…ーーー!」

その感覚を、理央は知っていた。これは以前、彼女がこの世界に来たとき、禁じられた森で感じた”アレ”だ。野性の勘、生物に与えられた本能ーー死への恐怖。自然と身体が震え、冷や汗が流れる。ジエームズが息を飲んだ。リリーが怯えるように声を漏らした。ピーターが私の背中越しの”なにか”に、絶望を映した視線を向ける。

ーああ、そうだ、思い出した。

確か2年の夏頃、「最も危険な魔法生物」の本で見た。

猫科の、トラに似た容姿をもつ最凶最悪と言っている魔法生物だ。2メートルを超える巨体、俊敏な動きで敵を翻弄し、背中から生えたマント状の器官から強力な電撃を放つ。非常に攻撃的な性格で出会ったら即逃げなきゃとされる、肉食の魔獣。

理央の視線先に、ヴァジュラがいた。

18話 魔法生物 VS 魔法使い

あ、やばい

『グアアアアアアアア!!!』

なにがやばいって、この状況。予想した以上にヴァジユラって凶悪そうな魔法生物だった。全員固まって動くことすらままならない。普段何事にも怖がったり恐れたりしないジエームズやシリウスさえも震えを隠しきれていないのだ。――無理もない。こんな生死を懸けた局面に15・16の子供が冷静に対応出来る方がおかしい。つまりハリーはおかしい。すみません悪口じゃないです。

「リリー！先生を呼んできて！」

「え……」

「はやく!!」

「わ、分かったわ!!」

リリーを名指したのは単に彼女が一番後ろ出口に近かったから。弾かれたように走り出したリリーを邪魔されないよう、ローブの下から杖を抜き取り、適当な攻撃呪文でヴァジユラの気を逸らす。だけど全く効いてる気がしない。背中に感じる冷や汗を無視しながら、咆哮と共に襲いかかる牙や爪や電撃に必死に盾の呪文で対応する。

戦闘訓練は人並み以上に積んでるが、それはあくまで対人戦闘だ。対魔法生物じゃあない。というより私の体質的に、魔法生物相手は頗る相性が悪いので”戦う前に逃げる”が鉄則だった。ここにきて訓練不足が仇となる。

『グルオアアアアアアアアアアアアアアアアアア!』

「つプルテゴ・トタラム！」

「インペディメンタ!!」

「ステューピファイ！」

必死に思考を巡らす中で、ジエームズとシリウスが参戦してきた。わたしの隣に並んだ二人に、驚きと喜びが身体を走る。だからか、ほ

んの一瞬、ヴァジュラの爪の斬撃に反応が遅れた。

ーそつちにはピーターが

「逃げ」

「セクタム・センプラ!!」

瞬間、ヴァジュラの爪に切り裂いたような傷が残った。ピーターを庇うようにセブルスが前に立っている。

「あ…あ、ありが…」

「戦えないのなら貴様は下がっているペティグリュー!!」

ふ、ふおおおおおおプリンスウウ!!!

「…なんだあの呪文」

「……」

プリンスだ！生・プリンスの呪文！プリンスの呪文がプリンスの口から出たプリンス!!（?）

「うわあああセブルスありがとう！格好いい！イケメン！流石わたしのMYエンジェル!!」

「煩い！余所見をするな！集中しろ!!」

戦闘中でありながら、めためた興奮したわたしはヴァジュラそつちのけでラブコールを送った。当然ながら怒られた。もう照れ屋さーん！あれでセブルスったら自分でプリンスとか言っちゃうんだからもー。かーわーいーい。

はてさて、愛しのMYエンジェルセブつちが参戦して3対1匹となった。しかし抑えるのが精一杯、慣れない戦闘に子供達の体力や気力も次第に限界に近づくだろう。先生が来るまで持つかどうか、そんな博打を打てるほど楽観視もしていない。このままじゃ全員、ジリ貧だ。

「シリウス」

プルデゴ・マキシマを唱えほんのちよっぴり余裕が出来たところで声をかける。軽い息切れと汗を流すシリウスは怪訝そうに私の顔を見た。

ー私だって皆との喧嘩中、だらだらと休暇を過ごしていたわけじゃないのよ？分かったことだってある。

「このピアス、外してもらっていい？」

「はあ？」

ダンブルドアは「自身で」と言っていた。ならば、ダンブルドアじゃなくても、”私以外の誰か”なら外せるということ。そう気づいてクリスマス休暇中に残っていた子で適当に試してみたらロービンゴ。ちなみに外したくれた子（1年生）に私は「自分で着けた癖にピアスに外すの怖くなっちゃった人」と不名誉な認定をされている。残念すぎるだろ。

「いいから。はやく」

シリウスは急かす私に、訳の分からないといった表情で、でも聞き入れたように右耳に手を当てた。数秒ローその時、ヴァジュラがさつきまでとは違う明らかに興奮したような咆哮をあげた。リーマス曰く美味しそうな匂い、だ。ご馳走なんでしょう？

さあ。おーにさーんこちらってね。

19話 人生つてままならない。

「シリウス……それ……」

リーマスが呆然と、どこか恐ろしいものを見るような表情でシリウスの手元を見た。今度はダンブルドアが息を呑み、直ぐ様踵を返す。隣にいたマクゴナガルは慌てて彼の後を追った。

そうして教室に残された子供達は、リーマスから伝えられた真実に驚愕し。――シリウスは己のしでかした事態に、茫然と立ち尽くすことしか出来なかった。

別に自分だけが頑張ればいいのか、犠牲になればいいとか、そんなこと思っちゃあいない。只単に「適任だった」だけ。私は囷として役に立つし、子供達を戦わせるより確実に、なにより鬼ごっこなら慣れている。客観的に考えて、ダンブルドアの到着を、あの場面で戦い続けるより私一人囷として逃げた方が良かったのだ。

でも、この子供達は納得しないんだろうなあ。

ああ人生つてままならない。

「ジェームズ、そろそろ降ろして。私高いところそんなに得意じゃないのよ」

「…まだヴァジュラは下にいる」

「ダンブルドアが拘束してる。それに私も”ちゃんと着け直した”から大丈夫よ」

夜空に浮かぶ二つの箒――シリウスとジェームズ、その後ろに乗らされた私。下には拘束されたヴァジュラとダンブルドア、リーマスとリリー。おまけにマクゴナガル先生までいる。

ジェームズは流石クディッチ選手と云えるような軽やかな動作で下に降りていき、地面に足を着けた。

「あなた達全員怪我はありませんか!?!」

「僕とシリウスは大丈夫です。……………リオは知りませんが」

「ミス・タカノ！」

「あ、なにも……………」

「ああ……………貴方がヴァジュラに追われていると聞いたときは心臓が止まるかと……………自分がどれだけ無茶をしたのか理解しているのですか!？」

「スミマセンデシタ」

マクゴナガル先生の力が強い。掴まれる肩がさつきからミシミシいっている。ヴァジュラじゃなくて先生のせいで怪我しそうです。

「リオ……………本当になにもないのね？少し顔色が悪いけど……………」

「あー、ジェームズの筈のスピードが速すぎて三半規管が……………」

つまり、酔った。

だってだって、逃げていた廊下で、しかも後ろからいきなり腕掴まれて飛ばれたんだよ？ものつすごいスピードで。遠心力が凄いのなの。ジェームズとシリウスが助けに来てくれたことより、速さの方に驚いた。あと、ついでに言うなら耳が痛い。シリウスに引つ張られて無理矢理ピアスを付け直されたせいだ。あーいたいいたい。

「兎に角、ミス・タカノは私と直ぐに医務室に。他は寮に戻りなさい。既に消灯時間は過ぎていますよ」

「……………先生、僕らも医務室に……………」

「駄目です。あなた達は速やかに寮へ戻るのです。いいですね？さあミス・タカノ、行きますよ」

「あっはい」

ジェームズの進言をバツサリ切ったマクゴナガル先生は、有無を言わず私を医務室へ連れていった。この時私としてはラツキーと思っていたけど、医務室でのマダムポンフリーの雷を受けた頃には全くラツキーと感ぜられなかったことだけは記しておく。

そんで翌日。

殴られた。

20話 果たせない約束

前回のあらすじ：リーマスに殴られた。

えっ。

予想ではジエームズかシリウスかりリー。リーマスも考えなかったわけじゃあないけど、誰より先に殴られるとは思わなかった。しかもグーパン。容赦がない。彼の後ろにいるジエームス達も、まさか殴るとは思わなかったのか、目を見開いている。

「あー……ごめんなさい……？」

しまった、うっかり疑問形に。

「……僕は君が嫌いだ。」

「えっ」

この発言には割と傷ついた。少なくとも、未だじんじん痛むほつぺ以上に。

アホ面をかます私を他所に、どことなくふらりと近づいてきたリーマスは、私の目の前で止まる。そうしてそのまま私の肩に額を当て、もたれかかった。

「……君の、そういうところが嫌いだ。君は分かっている。君は分かっているのに分からないふりをするんだ。君が必ず大丈夫だって言うところも、それに対して僕らがどう思うのかも、君は知っていて直そうとしない。そうやっていつも通りなふりをして、大したことないって言って笑うんだろう？」

リーマスの、震える声で紡がれた言葉は、あまりにも的を射ていて、思わず目を見張った。

この子、まだ子供でしょう。すごい分析力だな。

「どこが「大丈夫」なんだ。君は女の子で、学生で、ちっぽけな」ただの人間」なのに。……お願いだからもう少し自分を大切にしてくれよ。このままじゃ僕の寿命が縮む……？」

頭の重みでズシリと左胸が重い。

はあ、と。吐き出された吐息が生温く感じる。

懇願するような声色に、じんわりと胸底から沸き上がる感情に、ほんのちよつぴり心が揺れた。

これがもし、私がこの世界に来たばかりの頃に言われていたのなら「うんそうだね」って素直に受け取れたんだろう。どろどろの砂糖みたい甘い言葉を、喜んで丸飲みしたに違いない。続いていた筈の未来を閉ざされて、受け止めきれない現実には、茫然と地べたに座り込んでホグワーツ城を眺めていたあの頃に。もしそれを言ってくれたのなら私は、きつと。

「リーマス」

だからね、ちよつと遅かった。

自分ひとりで起き上がった。目の前に広がる幾つかの道筋から、丁寧に補整された道を選ぶことが出来なくて、深く真つ暗な泥沼を開拓することを選んだ。歩く度に足が纏れて、転んで、血が出るのも分かった。目の前の泥沼が、いつか血の海に変わるかもしれないとも思った。それでも見て見ぬふりを出来なかったのは私だ。己に対する嘆きは辞めた。己に対する甘えは棄てた。囚われる足を動かし、泥水を啜り、たとえ血濡れになろうとも――生きて。そう、生きて。

後悔りはしないと、後悔しないと、もう決めてしまったから。

「心配かけてごめんね。」

ああ私はちゃんと笑えているだろうか。

下手くそな笑顔になつてる気がする。なんだかとおつても不安になつて、然り気無く顔を隠すように俯いた。

――優しい子。

けれどその優しさを向けるべきは、私ではない。

その想いは受け取れない。

そんな余裕はとうの昔に捨ててしまった。

でも嬉しい。ありがとう。

21話 迷子の少年

「何ブーツとしてるんだシリウス!!リオを助けに行くよ!!」

あの時、そう叫んだのはジェームズで。彼奴はリーマスの話を聞いて直ぐに、弾かれる様に駆け出して用具室の箒を取った。俺は茫然とその場に立ってることしか出来なかった。握り締めるピアスが自棄に重くて、足が鉛のように重かったのは覚えてる。

それ以外なにも考えることが出来なかった。

「リオって、なんなんだろうね」

勉強していたジェームズが、ポツリと横で呟いた。その言葉に、俺も、リーマスもピーターもペンを持つ手を止める。

「……なにが?」

「分からない」

「はあ?」

「前の怪我とかあの体質とか、それもあるけど……。こう、なんて言うか、同じところにいるのに僕らとは違うところにいる気がする。」

「ジェームズ、言うことが難しく僕分らないよ」

ピーターがそう言った。

「リオは時々、何処を見てるか分からないような目をするんだよ」

その言葉に、誰もが口を閉ざす。

俺自身心当たりがあったから、多分みんなもそう思ったんだろう。「改めて考えるとき、僕らってリオのこと全然知らないよね。本人が話してこないからって云うのもあるけど、何処に住んでるだとか、家族の事とか、ニホンには“マハウトコロ”っていう学校もあるのになんてしてホグワーツに来たとかとか、そういうの何も知らない。結局体質のことだってリーマスから又聞きしただけで、リオ本人から何も言われてないし。」

「多分……。僕が狼人間だってことがなかったら、リオは体質のことも

話さなかつただろうね」

リーマスはソファに寄り掛かり、ぼんやりと空中を見ながら呟いた。その言葉は、恐らく真実だった。

「なあどう思う？ 我が相棒。パッドフット」

ジェームズが羽ペンで俺を指してきた。必然的に他の二人の目も俺に集まり、どうも居心地が悪くて顔を背ける。

「さつきから一言も喋ってないけど？ 君。」

「……………別に」

「なら言わせてもらうけど、君、あの事件からリオのこと避けてるよね？ 責任でも感じてるの？」

「っ、」

「僕は責任なんて感じる必要ないと思うけどね。むしろ、悪いのはリオだ。体質のこともピアスのことだって、何も言わずにシリウスを利用した。もし知っていたら君は外さなかつただろう？」

ジェームズはくるくると器用に手先でペンを廻している。

「君らしくないね。ウジウジと溜め込むなんて」

「溜め込んでなんかねえよ。ただ…………」

「ただ？」

「俺らがもつと強ければ…………あいつは、あんな事しなくて済んだんだ…………」

あの時、俺らと戦い続けることより一人で逃げた方がいいとあいつは判断した。それはつまり

「そうだね。あの場で僕らはリオにとって【足手まとい】だった。」

” 足手まとい”

そう理解した瞬間、俺は何も考えられなくなった。内蔵が鉛になったんじゃないかって思うほど重くて、足が床に縫い付けられたかのように感じた。

あいつに対して怒りも沸いてる、責める気持ちだってある。でもそれ以上に、グルグル身体中を這い廻る、この言い様のない感情に吐き気がしている。

「だからさ、シリウス。僕に名案があるんだけど」

俯く俺の肩に手が乗った。顔を挙げると、ジェームズがいつもの悪戯が思い付いたような笑みを浮かべている。

「名案……?」

「そう。これは僕らの魔法技術も上がるうえ、リオの事だって知れる名案さ!!!」

ジェームズのニヤリとした口元から、その”名案”を聞いた俺とリーマスとピーターが、口を揃えて「はあ!?!」というのは直ぐの事だった。

22話 家、行ってもいいんですか？

「じゃあもういっそ、ウチ泊まり来る？」

ホグワーツ魔法学校の大きな廊下、中央。

あつけらかんと理央が言い放った言葉に、お年頃の少年達はビキリと固まってしまった。そんな彼等に対して、理央はきよとんと首を傾げている。勿論わざとだ。

ジエームズの名案とは、”ポッター家お泊まり会開催”だった。一つの部屋で寝食を共にし仲良くなったところで理央から色々聞き出す、序でに防衛術のコツも教えて貰おう、理央一人だと気まずいかもしれないからリリーも誘ってーリリーこれがジエームズの思惑だった。彼にとつて疑問解消・実力up・恋のチャンスと、一石三鳥な提案。ついでに言うならシリウスにも何か起きるかなと期待している。「ごめん、イースター休暇はやることあるから遠慮しとく」が、理央はこれを断った。しかしジエームズも簡単には引き下がらない。「来てよ」「無理だって」「君の大好きな僕のお願いだよ?」「うわっ自分で言ったよ」そうして言い合うこと約3分。折れた理央からの提案がウチ来る?だった。そんなウチ来る?行く行くみたいに言われても困る。自分から誘った筈のジエームズはそう思った。

「え……いいのかい?」

「うん。別に親とかいないから気い使わなくて平気だよ」

待って。それは全然平気じゃない。

リーマスは思った。

「で、でも、女の子の家に僕らが泊まるのは……」

「え?毎年セブルス泊まりに来てるよ?」

「「は??」「」」

おい糞スニベルス。

シリウスはうっかり殺意を洩らした。

「リリーとセブルス、毎年ウチに来てお泊まり会してるの」

「……………リリーと?」

「ジエームズ、顔。ほらウチって特殊でね、本来なら私達は学校以外で

魔法使えないけど、家の敷地内なら”臭い”がバレずに使えるの。だから自主的な練習とか勉強が出来るわけ。リリーもセブルスも魔法薬学に熱心でね、毎年ウチで実験してるよ」

”臭い”が消せる？」

「そう。ー内緒だよ？」

理央は口許に人差し指をあて、空いた片手でピンと耳元のピアスを弾く。その顔はまるで、悪戯が成功したジェームズやシリウスのようだった。

はてさて、当初の予定とは多少狂ったが、寧ろよい方向に転がったと思わざるを得ない。理央の家に泊まれ、尚且つ魔法だって使える、これほどの好条件は中々ないだろう。しかも家まではトンネルネットワークも使えるらしい。

あえて言うならば、それは

「今年もリリーとセブルスは来るって言ってるけど、どうする？」

「…そうだね、是非お邪魔させてもらうよ！シリウス、リーマス、ピーター、君達もいいだろう？」

「えっと…僕はリオが構わないなら」

「ぼ、僕も！」

「……………ああ」

「おっけー。ちなみに喧嘩したらその場で追い出すからヨロシク」

スネイプとの接触。しかし既に釘は刺された。ジェームズの反応も思った以上に悪くない。シリウスは絶賛ウジウジモードの為論外。なんとかなる。多分。

「じゃあ休暇入って三日後に四人で向かうね」

「ん、わかった。」

斯くして、お泊まり会の約束は果たされた。

「あの……僕ずつと気になってたんだけど」
「ん？」

「リオ、どうしてずぶ濡れなの？」

おずおずと手を挙げずつと気になってました、と言わんばかりに問うたピーター。ちなみに今日は太陽がサンサン煌めく快晴。それなのにリオはスコールに当たったかのように、全身ずぶ濡れだった。噴水にでも突っ込んだ？そんな疑問が頭をよぎる。

しかしリオはその問いを聞き、それはそれは蕩けるような綺麗な笑みを浮かべこう言った。

「ちよつと髪飾りを壊したのよ」

23話 お泊まり会だよ！全員集合！

高野理央はこの世界の住人ではない。

彼女は、気づいたら禁じられた森に放り出されていた。それ以前の記憶は曖昧で、どうか考えるより前に森の魔法生物達に襲われ、ダンブルドアに保護された。

そうして自身の置かれた現状に悩み、苦しむも、彼女は答えを見つけ、その際にねだった一つがこの家だった。

こじんまりとした、ごく普通の一軒家。ところがどっこい。ドアを開けると広い玄関ホール。廊下をぬければでっかいソファアールとテレビが備わったりリビング、大理石を使用したオープンキッチン、その隣の扉を開ければジャグジー付きの大浴場が。2階は自分用の寝室の他に、空き部屋が3つ。おまけに地下には特製の修行部屋。

全くもって外観と内装が伴わない。

これこそ魔法クオリティー。

ちなみに資金の出所は敬愛なる校長のポケットマネーである。

「みんな〜ご飯出来たからおいで〜」

長期休みに入り、お泊まり会初日から早一週間。最初は理央の家に驚いていた仕掛人達も今ではなんのその。リリーとセブルスに至っては今さらである。

「今日のメニューは？」

「さばの味噌煮とご飯、味噌汁、卵焼き」

「ミソニ？」

「俺チキンが食いてえ」

「唐揚げかく。じゃ、気が向いたらね」

此処に来てから各々が自由に学び、休み、遊んでいた。リリーとセブルスは魔法薬を中心に、魔法薬学が苦手なリーマスもそれに参加。ジェームズとシリウスは専ら防衛術、時おり理央に決闘を申し込むが今のところ全敗中。ピーターは理央に防衛メインの防衛術を習って

いる。家主の理央は家の家事をメインに行い、空いた隙間時間で皆に混じっていた。

「ん！美味しい。リオのニホンシヨクはとっても美味しいわ」

「じゃありりーも明日は一緒に作ってみる？」

「ええ、勿論！」

「あありりー!!僕にも君の愛情の籠った食事を食べさせてゲフツ！」

「煩いわよ！貴方はナットーでも食べてなさい!!!」

「ふん、食事中くらい静かに出来ないのかポッター」

「はい喧嘩しない。したら二人とも明日の朝食は納豆オンリーだから」

ちなみにこの中で納豆を食べたのは一人もいない。ピタリと動きを止めたジエームズとセブルスは大人しく食事を再開させた。

夕飯を食べた後は当番制で皿洗い、その後は順番にお風呂に入る。就寝前は全員が気ままに過ごした。テレビを見たり、課題をしたり、お喋りしたり。だから、その日がいつもと違うと理央が感じたのは入浴後。リビングに全員が集合し、リーマスが紅茶を入れていて、ソファに一人分ばかり空いた席を見たときだった。

「やありオ。一緒に紅茶でもどうだい？」

ジエームズがやたらいい笑顔で、招き入れる。

理央は素知らぬ顔だった。

別に驚くことではない。誘った時から予想していたし、元よりそのつもりだった。

「ありがと、で、何が聞きたいの？」

率直。

「君が隠していること、全部」

ジエームズも、また。

「また随分抽象的ねえ…」

「君は好きだろう？こんな言葉遊びが」
「なにそれ」

「ねえ、あの時怒ったのがリーマスだけだとも思っているのかい？」
ジエームズの声色が変わった。彼にいつもの飄々とした笑みや挑

発的な視線はなく、ただ静かな怒気を含んだ瞳をしている。理央は、そんなジェームズの顔を見て、バツが悪そうに視線を下にした。

「僕も怒ってる。君が無茶をしたことも、心配かけたことも、シリウスを利用したことも。」

「……」

「…ジェームズ…」

「君はなにも知らないシリウスを利用した。訳を知ったら傷つくことを分かっていた筈なのに。……リオ、君は僕の親友を傷つけた。仕返しに、今すぐに君に呪いの一つや二つかけてやりたいよ」

「…………ごめんなさい」

「…謝る相手が違うんじゃないか」

ジェームズは淡々と理央を責める。その光景を見て、いつもの逆だとリリーは感じた。

「シリウス…ごめんなさい」

「っ、……………いや、もういいよ」

「おや？パッドフット、それだけでいいのかい？あれだけ凹んでいたんだ、もつとリオにー」

「ジェームズ、もういいって言ってるだろ」

「…失礼。よかったね、リオ。我が相棒は今ので君を許したらしい。僕は違うけど」

「……………」

「…リーマスから聞いたただけだ。僕は、僕らは君から何一つ言われていない。そんな状態で、僕は君を許すことなんて出来ない。」

「それは…そうだね」

「話してほしい、リオ」

長い夜が、始まる。

24話 真夜中反省会

グラスには氷たっぷり、1/3までウイスキーを注ぎ、あとは炭酸。マドラーで数回混ぜれば完成。

つまみは枝豆。そこがナッツではないのは、単なる好みだ。ハイボールにお洒落さは求めてない。

一口飲んで息を吐く。時計を見ると、時刻は午前2時を回ったところだった。皆に話を終えたあと、私はどうしても眠ることが出来ずこうして起き続けてしまっている。未成年飲酒はご愛嬌。今更だ。

「……なんだか、なあ……」

独り言が予想以上に響いてしまった。あらやだ恥ずかしい。センチメンタル？なんて、自身を小馬鹿にするように笑おうとして、失敗。らしくもなく沈んでいる。そう自覚した。

途中まではよかった。

ピアスのことや、体質のことを話しているまでは。

「リオはマホウトコロにはどうして通わなかったんだい？」

この質問から、ダメだった。

「色々あつてね、色々つて？、色々だよ。それは話せない、リオは家族と仲が悪かったりするのかい？、え？」

「不躰な質問だったらごめん、でもそうなのかなって。君は休暇中、家には帰らないだろう？だから家族には会いたくないのかなって。」

バツの悪そうなジェームズの顔。横を見るとリリーが不安げに此方を伺うように見ている。ああそうか。彼女もこう思っていたのかと、その時気づいた。

するとなんだか苦しくなつて、本当にスルリと、何も考えずに言葉を吐いてしまった。

「そんなわけない。会いたいよ。」

「ならどうして？」

「でも会えない。会いに行けない。きっともう私の家族は私が死

んだって思ってるんじゃないかな。」

” 「え……」

” 「失踪して何年くらいで死亡届って出るんだろうね。分からないけどさ、お父さんもお母さんも妹もきつと諦めちゃってると思う。笑っちゃうよね、私、こうして生きてるのに。」

生きている、筈なのに。

一度吐き出した言葉は止まらない。下手くそな笑顔の私に対して、皆の表情はどんどん曇っていく。当たり前だ、こんな内容。やめろやめろ止まれ止まれ私の口。こんな顔をさせていい筈がない。知らなくていい、分からなくていい。何も知らないままでいて欲しい。ほーら、落ち着け私。心が荒ぶってるぞ私。吸って、吐いて、そう。いつも通りに。

と、まあその後はなあなあに。

いつも通り何食わぬ顔で話を切り上げて、その場はお開きとなった。

そうして皆は寝静まり、私は絶賛反省中というわけだったのだが。

「……随分と早起きだね。オハヨ、シリウス」

「……偶々目が覚めたんだよ。」

背後に気配を感じて、振り返らず声をかける。

近づいてきたシリウスの手元には暖かいティーポットとカップが2つ。

シリウスは紅茶注ぎ、これまた優雅な所作で、カップを私の前へと置いた。

飲みということなのだろう。

「……ん。あつたかくて美味しい……」

「……俺が淹れたんだから当然だ」

「ふっ……そうだね」

静かだった。

その一言だけ、あとは何も言わずシリウスは隣に座り紅茶を飲んだ。机の上のアルコールにも触れず、私に何かを言うこともなく。た

だずっと隣に座っていた。

横目に見える表情はいつも通り、ただハンサムな顔だなあっと思うくらいで。

ほんの少し、涙が出た。

6年生

25話 モテ期？

6年生になった。

まあ、だからといって日常は殆ど変わらない……と思っていたのだけれど。

「やありオ。」

「あらMr.ベルモント。ごきげんよう」

「マーカスでいいって言っているのに。隣いいかい？」

「…ええ、勿論」

いいって言う前に座ってるけどな。

そんな脳内ツイートは微塵も出さずにつこり笑う。

6年次からはふくろう試験に伴い、授業は選択制となる。特に進路にこれといって目標がない私は当然試験結果に沿って時間割を組んだ。そのうちの1つがこのマグル学である。因みにリリーやジェームズ達はいない。

そして、私の隣に座る彼の名前はマーカス・ベルモント、レイブンクローの6年生。マグル学の授業で知り合った学生だけれど、何故か最近異様に絡んでくる。授業中はもちろん、最近だと図書館や廊下でもよく声をかけてくるのだ。

うーん、まあ、あれだ。若者の甘酸っぱい青春と言うわけだ。多分。

「で、実際のところどうなんだい？」

「申し訳ないけど全く興味ない」

「ふーん、だってきシリウス、よかったね！」

「は、はあ!?!俺はっ、別に……」

「あ、ふくろう便……。リオ、君宛に手紙がきてるよ」

「ほんとう？ありがとー……。あ、お師匠からだ。」

「オシシヨー？変わった名前ね」

「うん。あ、ついでにリリー紅茶のおかわりもらっていい?」

「いいわよ、はい。」

「僕にもいいかい!?リリー」

「……………いいわよ。はい、ジエームズ」

グリフィンドールの談話室。

いつもの4人とリリーと私。6年生になつて授業で全員が揃わない分、こうして談話室でお茶をする機会が増えた。リリーとジエームズの仲もそれなりに良好である。(呼び方、いつのまにか変わってるし)

「それにしてもリオにモテ期がくるとはね。しかも相手はレイブンクローの王子様!」

あの王子がリオに惚れるとはねえ!ジエームズがケラケラと笑う。

そう、マーカスはレイブンクローの中でも優秀で、中々人気が高いようだった。勿論、目の前のジエームズとシリウスには負けるみたいだけど。

「モテ期ねえ…。そんなものよりどんなことでも暗記できる期が欲しいわ」

「なによそれ」

「だってマグル学、殆ど暗記なんだから!車や飛行機の造られた年代なんて知るかバーカって感じ」

「それはしようがないじゃない。マグル学、興味あつて取つたんでしょ?」

いや全く。

テストが楽そうだったから。

「マグル学も、この先の職業に繋がるんだから頑張りなさい」

いや働くつもりない。

世界を救つた(笑)お礼に一生ダンブルドアに養ってもらつつもりだから。——とはこの優等生リリー・エバンズに言えるわけもなく。

目線を外して先程受け取った手紙をペラペラ開封する。別にいい大人がニート希望とか、若き子供たちに対して居た堪れなくなつたわ

けじゃないよ本当。

「ーでも、私も少しくらい興味を持ってもいいかと思うわ。リオ、今までちつとも恋話とかなかったんだもの」

「ええー…リリーまでえ？」

「もちろん、私も相談にのるわ！」

心なしか目が輝いてるリリー。

くそう、リリーもそっち側か。まあ、年齢を考えれば当たり前なのかな？ キヤピキヤピするよね、こういう話題って。若い頃の自分どうだったかなあ…：…うーん、思い出せない。実のところ、こっち、にいるのが長くなったせいで最近、まえ、が思い出せないことが多いのだ。いやー、歳かなー。正直、こっち、の未来も、時々怪しくなったりするのよね。いやー、まずいまずい。情報は大事なもの。

「リオ？」

「ああうんなんでもないよ。あー、とりあえず気持ちだけ貰っておくね。」

「もうリオったらー！ そんなに興味ないってこと？」

「やだなありりー、私だって女の子だよ？ 普通にあるよ」

興味がないわけではない。ただ、余裕がないだけだ。

手元の手紙に視線を下ろす。

ーふむ。指輪のレプリカが完成したのか。

「まあ、そういうことは余裕が出来た頃にね」

ならそろそろ次を始めないと。

部屋に戻り次第早速返事を書かなきゃね。

26話 奇妙な会合

うーん、やっぱり私モテ期が来たのかもしれない。

青空を見上げて、ぼんやりと思いつけてみる。

膝の上で眠る、スリザリンの少年。

俗に言う、膝枕というやつだ。

遡ること数時間前。

「あ」

「……………チツ」

休日の昼下がり、人気のない茂みの一角で互いに顔を見合わせる。

あ、この人知ってる。

「……………マシビエール？」

「マルシベールだ。穢れた血の分際で俺を呼び捨てにするな。」

そうそうマルシベール。セブルスと仲のいい子、そのくらいしか知らないけど。実際これまで話したことなんてなかった。

大抵え、え、エイブリー（だっけ？）とつるんでいるイメージがあるけど、こんな所に一人でいるなんて。

「そう、こんにちは。こんな人気のないところで何してたの？」

「貴様には関係ない」

こんにちはも言えないのか、コイツ。

「そう、私はちよつと一人になりにきたの。集団行動は苦手だね」

レイブクロウの王子様の一件のせいか、最近女子に囲まれる機会が増えたのだ。純粋な好奇心は勿論、嫉妬や妬みまがいの感情を束になって受けることだってある。まあ直接危害が加えられたってわけじゃないけど、精神的にね、ちよつと疲れたなーって思う時もあるよ。若い子のエネルギーにやられちゃうってやつ？あれこの台詞年寄りみたいだな。

「……………貴様の都合なんてどうだっていい」

マルシベールは典型的なスリザリン生といった態度だった。眼鏡

かち割ってやろうか。チョモランマ級のプライドで構成された傲慢な態度、自分達がこの世で一番偉いと思ってるような、ほんとあの自分で帝王とか言っちゃやう厨二病拗らしたゴミ屑ハゲクソ野郎みたいな……ゲホンゲホン。あら失礼。別に怒ってないわよ？こう見えても大人だもの。

「あはは、そう？……ってねえ、顔色悪いけど大丈夫？」

「ツ、穢れた血が僕に触れるな」

まるで汚いもののように、思いつき振り払われた。

……………。

ベタベタベタベタベタベタベタ

「ツ、貴様なにをする!!」

「いやなんかムカついたからすげー触ってやろって思ってる。」

「おい！どこまで触って、!!ふざけツーーっ、う、！……」

「え、わ、ちよ、あんた大丈夫!？」

「黙れっ、っー」

「……悪ふざけしてごめんなさい、体調が悪かったのね。」

地面に膝をつき、苦しそうにえずくマルシベールの背中をさする。

今度は振り払う気力がないのか、されるがままだった。

ある程度収まったところで消失呪文をかける。地面に吐き出された汚物はあつという間に綺麗になった。胃の中のものを出して、少し楽になったのか、マルシベールが覚束無い視線でレンズ越しにこちらを見た。

「お、前……」

「……少し寝て休んで。ここにきたってことは医務室には行きたくないんでしよう?」

理由は分からないけど、野暮なことは聞くまい。

抵抗される前に杖を振るった。

で、冒頭に至る。

そよそよと心地の良い風が吹く。

この分だと午後の授業はまるまるサボりだなあ。
空を見上げた後に、膝上へ視線を落とす。

膝の上ですやすや眠るマルシベールは、それは綺麗な顔をしていた。やっぱ凄いよな、ハリポタ世界。あっちもこっちも美男美女なんだもの。リリーの髪も綺麗だけど、この子も綺麗な銀髪してるなあ。こうして寝てるとごく普通の少年なんだけどなあ。この子も将来死喰い人になるんだよなあ。

「……………ん、……………」

「ああ起きた？おはよう」

「!!」

「はい眼鏡」

膝の上で勢いよく起き上がったマルシベールに、割れないようにと（勝手に）取った眼鏡を渡す。唾然としている彼を置いて、今度は私は立ち上がった。「じゃあね」と軽く告げ、特に返事が返ってくるわけもなく、さっさとその場を離れていく。

こうして、奇妙な会合は幕を閉じた。

談話室に戻るや否や、授業をサボったことにリリーからの雷が落ちたことは言うまでもない。

27話 こんにちは、モブです。

私は正義の味方でもヒーローでもなんでもない。

ただの普通の人、物語でいうならモブだ。

だからどつかのパンみたいに大勢の人を助けたりだとか、どつかのオラオラ言う人みたいに世界を救ったりとか、火影になって里を守るんだとか。そういうことは出来ないし、しようもしない。どつかの英霊みたいに自らを犠牲して、正義の味方を目指したりだってしない。私は自分の限界を理解している。

精々、目の前にいるほんの数人に手を差し伸べるだけで精一杯だ。

私は普通の人だ。生きること、生かすことで精一杯な凡人だ。

「返す。」

「はっ。」

あの会合が偶然で、もう関わらないと思っていた。

でも流石に、これは言わなくてはならない。

「こんな高そうなもの、受け取れないわよ」

今朝ふくろう便で届いた個包。中を開けるとそれはべらぼうに高そうな宝石のついたネックレスが入っていた。差出人は書いていない。

なんとなく、察しがついた。

「……女つてのは、こういうもんが好きなんだろう」

図書館にいるせいとか、はたまた別のせいとか、マルシベールの声は小さかった。個包を押し付けられた彼は戸惑ったように視線を泳がす。

ああ今までこんな風に断られたことがなかったんだろうな。

その顔が酷く子供らしく、私は目を背けたくなった。

「別にこんなもの受け取らなくても、この間の一件は誰にも言わないから大丈夫よ。」

そうでなくても、私は彼にあまり関わりを持ちたくないのだ。干渉するのはこれ以上避けておきたい。じゃあね、そう一言告げで背中を

向ける。

「待て」

「なによ」

「俺は借りを作ることが嫌いなんだ」

「あなたの好き嫌いなんてどうだっていいわよ」

「…ちっ」

「…舌打ちしたいのはこっちなんだけど。」

思わず、手元の地図をぐしゃりと握ってしまった。おおつとまづい。頼み込んで、なんとか仕掛け人達から借りた忍びの地図だ。「ちよつと野暮用でマルシベルに会ってくる。面倒事は避けたいから、1人の時に会いたいよ」と言った時のシリウスの問い詰めときたらまあ大変。ジエームズがフォローに回ってくれたほどだ。なるべく手短かに、穩便に終わらせなければまたシリウスが面倒くさいことになる。

「なら何が欲しい。ドレスか？髪飾りか？」

「だからなにもいらぬわよ。そういうのにも興味ないし」

「…お前ほんとに女か？」

「自分の枠組みだけで物事考えてんじやないわよ。大体お礼つてもんを押し付けてる時点でそれお礼でもなんでもないから。ただの自己満足だから。あなたの自己満足に付き合う方が面倒くさい、」

しまった。うっかり本音が。

しかもイラついてるせい、キツイ言葉に。

恐る恐る少年を見ると、その表情は心なしか寂しそうに、傷ついたように見えた。——ああもう！苛立ちと焦りが、わたしの心を掻き乱す。

「…：兎に角、お礼にしろ借りにしろこれは受け取れない。あなたがこれを借りだと思ってるのなら…：そうね、他の生徒に悪質な魔法をかけるの控えてもらっていいかしら？」

「はあ？…：そんなもんお前に言われる筋合いねえだろ」

「…：じゃあもういいわよ。はい、この話はおしまい。そろそろマダムの目も痛いし」

これは本当だ。図書館で話している私たちを、さつきからマダムはずっと見ている。

「じゃあね……、ああ、体調には気をつけて」
「……チツ」

マシビエールはもうわたしを引き止めなかった。図書館を出たところで、私は大きく息を吐く。——これでいい。これでおしまい。わたしは彼と関わりなんて持ちたくない。持ちたくないのだ。

いずれ敵になる、死喰い人なんかと。

28話 とある師匠の見解

あくる日の休日。

1人の女と1人の男がそこにいた。

「お師匠、この屋敷お化けがでそうです。」

「貴様…、その呼び方はやめろと言ってるだろう。」

「じゃあムデイちゃんで」

「……………やめろ」

「じゃあお師匠で」

「……………」

「お師匠、私の警戒網に引っかけたお師匠こと、マッドアイ・ムーデイ、
うっかり殺気を漏らしていたお師匠こと、マッドアイ・ムーデイ。
理央がこの世界に来て2番目に会った人物だ。そして理央の魔法
を教えた張本人でもある。これまで幾度となく彼女に魔法をかけ、時
には大怪我、時には三途の川に足を入れかける程に鍛え上げた。それ
でもこの笑顔と軽口は変わらない。今も昔も、理央は理央のままだっ
た。マッドアイは思う。彼の周囲はよく彼を、イカれている、と表
現するが、彼にしてみればこの自称弟子の方がよっぽど、イカれてい
る”。

「二手に分かれて探しましょう。ああ見つけても指輪に触れちゃダメ
ですからね」

「…ふん、若造の呪いなどどうとでも…」

「あー、ダメですって。ダンブルドアそれで死んでますし。」

理央は極めて重要な未来をケロリと口にする。

だがそれは必要なとき、必要な部分だけであって、詳細は伝えられ
ない。それも、いつものこと。

「……………わかった。」

彼女はなによりも己の知る情報が漏れることを恐れているのだ。
「自分以外に1人が知ったことは、それはもう秘密じゃないんです

よ。」そう言われて、マッドアイ自身記憶を消されている。

閉心術を習得する際、彼女の記憶を彼も見ってしまったからだ。マッドアイは思い出す。初めて理央と会った日を。

私に魔法を教えてください。お願い。そう頭を下げる少女がいた。

妙な雰囲気があった。子供と呼ぶには些か違和感がある、まるで中身と入れ物が合っていない、そんな印象を持たせるほどの。

「……ありましたね」

「……ああ」

「じゃ、壊しますよ……えいつ！」

出会ったその日からマッドアイと理央は修行の毎日だった。

魔法のコントロールを教え、呪文を教え、防衛術を教え、閉心術を教え、そうして最後の方はおよそ修行と呼ぶには生温い、拷問を行った。理央がそれを望んだからだ。

「あとはレプリカを置いて……うん、これでよし」

「終わったのか」

「はい！これでこの指輪は大丈夫です。あー、よかった。」

ありがとうございます、お師匠……理央は笑う。

あの頃と同じ笑顔で。

「あ、でもまだ闇の陣営皆殺し大作戦は続くんで協力お願いしますね！」

「………物騒な作戦名だな。」

「また文句、……ほん。じゃあ世界救出大作戦とかにします？……うーん、でもそれだと微妙ですよねえ、なんか正義の味方みたいになっちゃう。」

高野理央。グリフィンドールの6年生。

軽薄な態度と口調で一見すると普通に見える、歪でイカれた少女。それがマッドアイの見解だった。

29話 ハロー、グッドバイ

「どうしたんですか。」

「んー、」

「頭が重いんですが」

「そっかー」

生返事だ。

レギュラスはそう思いつつ、人の肩を勝手に借りて、唸る少女に視線を向けた。

昼下がりのベンチ。いつの日からか二人の定位置となったそこ。

別に約束するわけでもない。ただ、ふとした時にここにきて、タイミングが合えば顔を合わせる、そうでなければ1人で過ごす。それがレギュラスと理央のいつもの流れ。

ここは人の気配がなく、静かで、穏やかだ。本を読むのにちょうどいい。レギュラスは大抵本を読んでいるが、理央は本を読んでいた、何か食べていたり、何かを書き込んでいたりする（japanese だから書かれてる内容は分からない）。今日はそのどれでもなかった。

唸っている。と思ったら空を仰ぐ。人の肩に頭をグリグリ押し付ける。

奇行だ。それもいつもより酷いほうの。

「そういえばマルシベールと何かあったんですか？」

「！」

分かりやすく理央の身体が跳ねた。

これにレギュラスは驚いた。彼女は別に寮や家柄なんて気にしない、だから「あ、うん。実はねー」なんて返ってくると思ったのに。

「なんで…」

「…彼に聞かれましたので。貴方のことを。」

「…そっか」

理央はそう言つて、再び空を見上げた。

一体何があったのだろう。マルシベールに聞かれたのは理央がど

ういう人柄で、何が好きかくらいだけだ。質問の最中の彼は居心地の悪そうな表情で、あまり良好な関係とは思えなかった。この様子の理央を見ても、そう思う。ただいつもに増して奇行が激しい彼女に、これ以上何を聞いても望む答えは返ってこなそうだな、そうレギュラスは思った。

「レギュラス、私ね、正義の味方になりたいのかもしれない」「は？」

ついに言動までおかしくなったか。

「でもね、やっぱりなれないの。多分それをしたら死んじゃうから。そういうもんでしょ？ナルトはネジ兄さん、承太郎は花京院だし、BLEACHに至っては沢山いすぎて泣けるっ……！」

「…でも、つまりそういうことなんだよ。やっぱ尺とか見せ場とか変な情とか、そういったものは基本ダメなんだよ。駄作か、打ち切りでいいんだよ。それが私の幸せだもん。」

何言ってるんだ、この人。

言ってることの半分も意味がわからない。

レギュラスは考えることを放棄し始めた。

レギュラスからなんだこいつ、みたいな視線を受ける当の本人は未だにあーだかうーだか唸っている。

一通り唸り終えた？理央は、何故かちよつと泣きそうな顔をしていった。

「ねえ、レギュラス。私はいつでもあなたの味方よ。」

「え…」

「だからもし、趣味の悪いペンダントを壊したいなあとか捨てたいなあとか思ったら迷わず私に声かけてね。一人でやろうとしちゃダメよ？」

なんですか、それ。

そう口にする前に理央はレギュラスの肩に頭を置いた。少し、震えている気がする。

「どうしたんですか。」

「んー、」

「頭が重いんですか」

「そっかー」

「…これは貸しですよ」

レギュラスはそっと彼女の頭に触れた。

「…ありがと、レギュラス」

30話 お相手は？

もうすっかり寒くなった。

談話室の窓の外は一面の雪。

轟々と燃える暖炉の前に座る私と、そのすぐ近くでたむろういつものみんな。

「シリウス、今年のクリスマスパーティーなんだけど一緒に行かない？」

うー、さむさむ。冬のイギリスは寒いなあ。東北とかとどっちが寒いんだろ。

「は…？」

「やつは無理か。うーん、レギュラスもセブも断られちゃったのよね。あ、リーマスとピータは相手つてもういる？」

「待て待て待て待て!!!行かないって言ってるないだろ!?つかなんでレギュとスネイプが先なんだよ!!!」

「シリウス、リオの首がしまってるよ」

「わ、悪りい…」と胸ぐらを掴んでいた手を離してくれたシリウス。

苦しいんじゃないボケ、そんな意を込めて奴の頭を軽く叩く。

すつげえ睨まれた。

「それにしてもどういう気の回しだい？」

「なにそのニヤつき…。リリーと行けることになったからって調子乗ってんじゃないわよ」

「ふふん、そんなに僕が羨ましいかい?!いいさ羨ましがるといい!リリーの可憐なドレス姿を僕が独り占めして「五月蠅いわよジェームズ」ごめんよリリー!!」

グリフィンドールの談話室で、もう見慣れた夫婦漫才だ。ちなみにまだ付き合っていない、らしい。よかったね、セブたん。

ティーポットを持って私の横に腰掛けたリリー。ありがとう、そう口にしてリリーの入れてくれた紅茶を受けとった。

「ねえリオ、Mr.ベルモントからお誘いはなかったの？」

「いやまだきてない…というか、あの人から誘いが来た時断る理由が

欲しくて探してるんだけど…」

「え？……それって」

「いつそ告白でもしてきたら楽なんだけどなあ。」

この数ヶ月、彼は積極的に話しかけにくるものの決定的な言動は一切なかった。それがまたややこしくするというか、なんというか。

「Mr. ベルモントになにか欠点でもあるの？ なにか酷いこと言われたりされたりとか」

「いや全く。すごく紳士的だよ」

「ならどうして？ 私も図書室で数回話した事あるけど、社交的で親切な人だったわ」

「なんだって!?! リリー!! そんな僕以外の男と話すなんて!!」

「ああもう！ あなたは黙ってて!」

ぎやあぎやあ始まった漫才横目にお茶を飲む。

単純にお付き合いとかそういうものを望んでない、そもそも高校生レベルの男の子に手を出す年齢でもない、強いて言うならなんか、こう、ねちっこそうで嫌。もろもろ理由はあるがそれを説明するのも面倒だったので「タイプじゃない」の一言で終わらせたらリリーからのすごい抗議を受けた。そんなの勿体無い、試しにお付き合いしてみたら変わるかも、いやいやリリたんそんなタイプじゃないでしょう。どうした。…だって、理央に幸せになって欲しいのよ…。可愛いだよ。キュンとした。

「で、シリウスどう？ あー彼女とか他に行く子いるんだったら無理には「行く」あ、ほんと？ よかった〜ありがと〜」

そんなこんなで今年の相手はシリウスで決定した。

ちようど彼女が切れてたみたいだ。ラッキー。

「ところでピーターとリーマスは今年誰と行くんだい？」

「ああ、僕はサンドラだよ。彼女、恋人と喧嘩中らしくて僕と代わりに出て欲しいって」

「あそこいつも喧嘩してるもんねえ。ベットのうえでいつも愚痴ってるわ…全く喧嘩するほど仲が良いというか…」

「ぼ、僕はロマニって子と…。一つ下のレイブンクローの…」

「誰だっけ?」

「魔法薬学が得意な子よ。私、図書室で話したことあるわ。ロマニ・リドルって子よ。」

「えっ…と、リドルじゃなくて、ハーベストだよ。リリー」
「え?」

「ああ、あの栗色の髪の毛!」

中々可愛いやつ捕まえたじゃねーかピーター!、シリウスが笑いながらピーターの肩を組む。

「おかしいわね…」

「リリー?どうしたの?」

「いえ…前に図書室で話したって言ったじゃない?その時にお兄さんのノートも一緒に持ってて。その名前がトム・リドルって名前だったんだけど…。見間違いかしら?」

ガシャン

「え、ちよ、リオ!」

「おい火傷してないか!」

「あ、うん。ごめん」

ちよつと待て。

そつちの対策はまだしてないぞ。